
コナンv s キッドv s ハヤテ

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ナン v s キッド v s ハヤテ

【ZPDF】

Z0004C

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

ある日三干院家に怪盗キッドからの予告状が届く、嫌がるナギをよそに、クラウスは小五郎に依頼し、そして「ナンも一緒に三千院家へ、ここにキッド、ナン、そして借金執事ハヤテのバトルがスタートする。

プロローグ（前書き）

この作品は例によつて「ナン」と別作品の「リボ」です。その手の作品がだめな方はこのへんでお戻り下さい。

プロローグ

ある日の江古田町。

今世を騒がせている怪盗キッド。その正体はこの江古田町に住む高校2年生の黒羽快斗である。

彼が怪盗キッドをやっているのは父親を殺した真犯人を突き止めるために、その連中が狙っているパンドラと呼ばれる宝石を破壊するためであった。

しかし、いくら宝石を盗み続けても中々パンドラは見つからないし、そして父親を殺した連中の正体もわからない。そして盗むたびに彼の心のわだかまりは大きくなっていく。

そんな今日この頃、彼は一人で江古田高校から帰宅するとじれりであつた。

「いつになつたらパンドラは見つかるんだろう。」

1人そんなことを呟く快斗。言ひてどうなる物でもないが、こう見つからないとそもそも言いたくなるのだ。

「パンドラが目の前に落ちていたな。」

そんな馬鹿なと自嘲しながら、歩くのをやめふと足元を見てみると、そこになんと宝石らしき物が落ちていた。

「・・・・・何かの冗談かな？」

有り得ないと思いながら、それを拾い上げてみる。そして持つた瞬間、彼自身の経験によりそれは本物とわかつた。

「ほ、本物だ。」

宝石はどうやらダイヤのようだが、でかい。十数億になりそうだ。さすがに月にかざさないとわからないが、もしかしたらパンドラかもしれない。

それをもつて帰ろうと、鞄に入れようとした時、後ろから声をかけられた。

「あ、あつた……」

「！？」

声のした方を見ると、自分と同年代の青年と、12・3歳ぐらいの少女がならんで立っていた。

「いやあすいません。あなたがそれを拾ってくれたのですが？」

「え！ は、はい。」

「そうですか。すいません。実はその宝石、お嬢様が落としてしまった物で。」

青年がそう言つた途端、少女が不機嫌な表情になる。

「こりゃハヤテ！ 落としたのではない！ 落ちてしまつてたのだ……！」

「はいはいお嬢様。」

どうやら持ち主らしい。

「え、じゃあこれはあなたの方の？」

とても子供が持つ物のゆには見えない。しかし田の前の青年が嘘を言つているようにも見えない。

「だつたらお返します。」

「そうです。では、ありがとうございました。」

さすがに田の前に持ち主がいるので持ち帰るわけには行かず、快斗は宝石を青年に返した。

青年は宝石を少女に渡した。

「はいお嬢様。」

「うん。」

「では、私たちはこれで、本当にありがとうございました。」

青年は快斗にお辞儀した。

「いえ。」

そして二人は行つてしまつた。

この瞬間、怪盗キッドの次の仕事が決まったのであつた。

プロローグ（後書き）

次回更新は3日後の予定です。

やの山の三十院隊（前書き）

今日からタイトルを変更します。

その日の三千院家

ある日の三千院家

その日も、この屋敷の執事である綾崎ハヤテはいつもどおり、門に付けられた郵便受けをチェックすべく、その扉を開けた。社交界へのお誘いや、なにやら高級品の宣伝等の封筒が沢山入っている。もつともこの家の主人である三千院ナギはこういったものにはあまり興味を示さない。行きつけの店で大体揃えてしまつからだ。大方開けられぬままゴミ箱行きがオチだ。

と、その中に見慣れない封筒があるのにハヤテは気づいた。

「なんだろう？」

それは宛名も差出人も書いていない真っ白な封筒であった。

「また脅迫か何かかな？」

すさまじい財を持つているナギは時として暗殺のターゲットにされることがある。脅迫まがいの手紙も多い。

ハヤテはその手紙の中身を念のため確認してみる。手紙を一読した瞬間、彼の目は見開かれた。

「これは！」

彼はすぐに屋敷へ走った。

屋敷に入り、長い廊下を走り、そして居間の重い扉を開けた。

「お嬢様！！」

部屋の中には、食事中の少女が一人いた。弱冠13歳にしてこの屋敷の主人である三千院ナギである。

「どうしたのだハヤテ？血相変えて。」

「大変ですか嬢様。こんな手紙が届いていました。」

そうして彼はその封筒と中の手紙をナギに手渡した。

「また脅迫の手紙か？」

うんざりした顔で手紙を受け取るナギ。

「いえ、そうじゃないんです。」

「何！？」

ナギは手紙に目を通す。
内容は以下の通りであった。

3月20日 あなたのお持ちのダイヤのブローチを戴きに参上する。
怪盗キッド。

怪盗キッドからの予告状である。

「ど、どうしましようお嬢様！？」

ハヤテの慌てぶりとは対照的に、ナギは表情を変えずに言った。

「これがどうしたというのだハヤテ？」

「はい！？」

「こんなのが良くあるいたずらあ何かだろ！」

その言葉に、ハヤテは開いた口が塞がらなくなつた。

「あのお嬢様、もしかして怪盗キッドを知らないのですか？」

「知らない。」

そつけない一言。

さすが良家のお嬢様。今世間を騒がす大怪盗などにまつたく興味はないらしい。

「お嬢様。怪盗キッドというのはですね……」

ハヤテはここでキッドのことを1から丁寧に説明した。

「…………という世間を騒がしている大怪盗なのです。」

「ふーん……けどまあダイヤの一つぐらいくれてやつても。」

またとんでもないことを言うナギ。まあ即金で1億5千万の現金を軽々と出す彼女にしてみれば、ダイヤの価値などその程度であろう。

しかし、ハヤテはあることを指摘した。

「しかしですよ、もしキッドが狙っているのがあのダイヤのブローチだったら。」

「はー！」

あのダイヤのブローチとは、こないだナギが落とし、快斗が拾ったダイヤのことである。実はこれ、彼女が8年前に死んだ母親から受継いだ形見の品の一つだ。先日ハヤテがクローゼットの中を掃除をしていた最中に見つけ、久しぶりに彼女はそれを友人のパーティに彼女は付けていった。その帰り道、危うくなくしあけたが、なんとかその時は見つかった。

無くしたとわかった時のナギの悲しそうな表情を覚えているだけに、ハヤテはもし奪われてしまったらと心配だつた。

「あの時お嬢様を見かけて狙ってきたのかも。・・・とにかく警察に連絡を。」

電話をとらうとしたハヤテ、しかしそれをナギが止めた。

「お、お嬢様！？」

「待ってくれ。もし狙われてるのがあのブローチなら、私は私自身で守り通したい。お願いだハヤテ。

警察には言わないでくれ！！」

「しかし・・・・・わかりました。取りあえず警察には連絡しません。とにかく、僕はマリアさんとクラウスさんにも伝えてきます。」

「ありがとうハヤテ。」

ハヤテは急いで部屋から出る。そして走つた。

（お嬢様を傷つける奴は誰であろうと許さない！お嬢様は僕が守る！）

もう心に誓いながら。

その日の三院家（後書き）

次回更新は明日、または月曜日です。

その日の三千院家 下 あるこなわの日のパン

「ふむ。予告状ね。」

予告状を見ながらそう言つのは、三千院家執事長のクラウスだ。
「けど、防犯ロボットが屋敷中にはあります。ＳＰの方々もいますし。
その怪盗キッドといえど入つてこられないのでは？」

樂観的な意見を口にしたのはこの屋敷唯一のメイドであるマリア
だ。やはり彼女もキッドを知らないようだ。

「マリアさん、それはキッドをあなどついています。キッドは今まで
何度も絶対に突破不可能といわれた防衛網をすり抜けて獲物を盗み
出しているんですよ！！」

「けどハヤテ君。ＳＰの方たちよりも弱い警察を呼んでどうかなる
でしょうか？」

「う・・・・・」

三千院家では屋敷内で働いている人間は数えるほどしかいない。
それは主のナギが極端に使用人嫌いだからだ。だが屋敷外の敷地内
にはそれこそ蟻一匹入れないとばかりにセキュリティーロボットと
ＳＰが24時間監視しており、さらにそれらの武装も、バルカン砲
にミサイルといった警察の特殊部隊以上の物を持っている。

ちなみに、ハヤテの知る限りでは三千院、愛沢、鷺ノ宮といった
名家には銃刀法違反という法律はなぜかないらしい。

「しかし彼の言うとおり万全の態勢で挑み、三千院家の安全を守る
のも我々使用者のつとめですよマリアさん。」

「ではクラウスさん。何かいい方法があるのですか？」

「力だけではいけませんよマリアさん。頭の面でも守りを固めるべ
きと思います。だから、探偵を呼びましょう。」

このクラウスの決断により、この話は大きく動き出すこととなる。

同日夕方毛利探偵事務所

「この日も、江戸川コナンはいつもどうづの時間に帝丹小学校から帰ってきた。

「ただいま。」

事務所の扉を開けると、客用のソファーに1人の紳士が座っていた。

「あれ、お客様？」

「ああ、コナン帰ったのか。あ、すいません。こら子供は上へ行け。

「いや、かまいませんよ。息子さんですか？」

「いえ、こいつは居候でして。」

「ああ、そういうえばキッドを手玉に取つたといつ少年ですか。ならば彼にも一応聞いてもらつ必要がありますな。」

そのキッドという言葉にコナンは敏感に反応した。

(キッド!...?)

「ああ、まあいいでしょ。で、キッドからの予告状では3日後にダイヤを盗みに来ると書かれていたのですな。」

「そうです。まあ三千院家のセキュリティーは万全と言う自負があります。しかし念には念をいれるべきだと我々使用人は考えまして今日うかがつたしだいです。」

クラウスの言葉に、小五郎が疑問を持った。

「待ってください。ではあなたの方の主が読んでいるわけではないのですか？」

「はい。何分負けず嫌いな性格でして。警察に通報するのも拒んでいます。」

(警察に連絡しないって、よつぱり負けず嫌いな性格なんだな。)「ナンの率直な感想である。

「しかし、主の許可を取つていないとなると。 . . . わかりました、私がまずその方を説得してみましょう。そして、ダイヤも守つて御覧に入れましょう。」

「わかりました。では明日の便車を差し向けてますのでそれにお乗りください。」

そしてクラウスは帰つていった。

「ふん。三千院家ね。一体どんな頑固な主人なんだか . . . 小五郎が貰い受けた名刺を眺めながら言つた。

しかし、コナンにはどこかその名前に聞き覚えがあつた。
(三千院・・・・・・どつかで聞いた覚えがあるんだけどな . . .)

最終的にコナンが答えたたどり着いたのは夜のことであった。

アのアリナ院隊ト むるこせんのアリナ（後編）

次回更新は月曜日の予定です。

その日のコナン・快斗・・・

その日の夕方毛利家

「え！－三千院家？お父さん『冗談言つてないわよね。』

夕食の時間、蘭が小五郎から聞かされた今日の依頼人に關する話に對しての第一声である。

「冗談じやねえよ。けどそんなにすごいのか、三千院家つて？」
「園子から聞いた話だと、鈴木財閥が足元にも及ばない世界有数の大財閥だつて。」

その言葉に、コナンは思い出した。

(そうか、確かに三千院家つていつたら大財閥だ。普段はあまり表に出ないから聞かないけど・・・でも、あそこの当主つて誰だ?)
さすがのコナンもその当主が13歳の少女とまではわからなかつた。

「蘭、その話本当か？あの鈴木財閥よりすごい会社があるのかよ？」
胡散臭い目で見る小五郎。どうやら彼は半信半疑のようだ。

「わかんない。園子に聞いただけだから。」

蘭も断言できる材料を持つていなかつた。

「まあ明日になればわかるでしょ。」

「コナンが相槌を打つた。

「ま、そうだな。」

「うして毛利家の夜は深けていった。

一方、予告状を出した快斗は困っていた。

「まいつたな・・・・」

今回彼が困った点は、三千院家に関する情報があまりないという事だった。

インターネットやその他あらゆる手段を使って情報収集に努めたが、わかつたのは当主が弱冠13歳の少女であるナギであることと、その屋敷が練馬にあることだけであった。もちろんその屋敷についても調べたが、地図にはその広大な広さしか示されておらず、また今はやりの衛星からの調査ではなぜかその部分だけ真っ黒で要領を全く得ない。

「まさか警察を断わるなんて。」

そんな広い屋敷だから不用意に潜入するのも難しい、そこで警官にばけるベタな手段を試みるべく、快斗は三千院家に予告状を出したが、ナギは警察の介入を嫌がり断わった。これが第一の計算違いであった。もちろん、警察、つまり警視庁一課にも予告状を出したが、どういうわけか警察も動いていないようだつた。

「あの中森警部が出ないはずはないんだけどな。」

実はこれはナギがコネを使って握り潰したのが真相であった。もちろん、中森警部は出動しようとの手この手を使っているのを彼は知らない。

「ぶつけ本番で行くしかないか。」

最終的にはそうなつた。

しかしそうなると色々準備が必要であった。こんなことは今まで殆どなかつたから細心の注意が必要となる。

「とにかく、寺井のじいさんにも情報収集を頼むか・・・・
」ついしてキッドも動く。

一方、ハヤテ、コナン快斗ともう一つ動いている者達がいた。なんとそれは黒の組織であった。

彼らの中で、宝石強奪専門のスネイクは、キッドの獲物を横取りすべく動いていたが、

今回警視庁に届いた予告状もいち早く察知していた。

そこで、早速の方に許可を仰ぎ動こうとしたが、待つたがかった。

「あの方の許可是まだおりないのか？」

「それがまだです。」

「くそ。」

部下に怒鳴り散らすが、それでビビるとなるわけではない。
(しかしなぜだ。なぜ今の方は許可をしぶるんだ?)

パンドラを得るためならあらゆる手段を許可してきたの方にしては不自然であった。

これには理由があった。それはナギの祖父の帝であった。

三千院家は総資産が兆単位のまさに大富豪であるが、その本家はナギの祖父である帝が取り仕切っている。の方はその帝を徵発することを恐れたのだ。三千院家を怒らせたりしたらそれこそ大変である。例え黒の組織といえど被害を喰らう可能性があった。

というわけで、黒の組織が動こうにも、の方がビビッているため動けないのであった。

その後、一応動くことは許されたが、スネイク達には厳しい条件が課せられる」ととなつた。

やの田の「ナン・快斗・・・（後書き）

「意見」「感想お待ちしています。
次回更新は水、もしくは木曜日です。

ござ、三千院家へ

翌日毛利探偵事務所

クラウスの言つたとおりの時間に、三千院家の車がやつて來た。それに乗り込み、3人は三千院家に向かつた。

3人とはつまり蘭とコナンも付いていくことだ。

最初小五郎は、2人が付いていくことに渋い顔をしたが、クラウスから別に家族連れでもどうぞという申し出を受けて、コナンと蘭の行きたいという言葉を断わりきれず、連れて行くこととなつた。車は米花町から、三千院家のある練馬区に向かつた。

乗り込んでみて、3人はその車の豪華さに驚いた。

電話に冷蔵庫等がついていて、さらにガラスは防弾ガラスである。これだけでも三千院家の凄さが垣間見える。

「こりやあ蘭の言つたとおりかもしれないな。」

ボソッと小五郎が呟いたが、コナンも同意見であった。

（本当に三千院家の当主ってどんな人物なんだ？）

コナンの頭の中はそれだけを気にしていた。

30分後三千院家

この日朝から三千院家は騒がしい。何台もの大型トラックが出入りしているからだ。ハヤテが気になつて屋敷から出てみると、続々と巨大な鉄の塊がトッラクから庭に降ろされ、姿を現した。

それはキャタピラを付け、細長い銃みたいな物をつけた、戦車のような物であつた。

「あのう、これは何でしょうか？」

ハヤテはその鉄の塊を受け取つていたS.P.に聞いてみた。

「うん？ これは対空戦車だよハヤテ君。」

対空戦車とは、文字どおり敵の飛行機を打ち落とすための戦車のことで、砲塔の外側に長い銃身を持っているのが特徴である。

ちなみに、この手の兵器は単価が高い（10億以上する）せいで、自衛隊も年に数両しか生産していない超価格兵器である。

それが都合6両揃えられている。

「で、なんでそんな物を？」

「我々の調査によれば怪盗キッドは空からグライダーでよく現れるそうじゃないか。だから空から来てもいいように急いで、菱と小製作所に頼んで持つてもらつたのだよ。それだけではないぞ、日本 鋼にも注文して対空機関砲も4基買い込んだ。これで三千院家の空の守りは完璧だ！！」

「はあ。」

なんとまあレベルの高い買い物だ。

ちなみにここで何故銃刀法違反にならないかを突っ込んではいけない。

「しかしこれで驚いてもらつては困るよ。今回は牧村さんに頼んでセキュリティロボの改造強化も行つてもらつた。そういうわけだから、お嬢様には屋敷には誰一人不審者は近づけないと伝えておいてくれたまえ。」

牧村さんは三千院家傘下の会社でロボット開発をしていた牧村志織嬢のことだ。ちなみに彼女は開発したロボットによる不祥事で、今はハヤテの通つている白皇学院の教師に左遷されている。もつとも、そのプロトタイプに襲われたことのあるハヤテとしては、さらに改造強化したという言葉に恐ろしくなってきた。

「わ、わかりました。」

そう適当に答えておく。

と、そこで屋敷の門から車が一台入つてくるのが見えた。

「あ、お客様のようです。ではこれで。」

「おひ。」

ハヤテはS.Pと別れて屋敷へ戻った。

車が屋敷に入った途端、3人はその大きさに驚かされる。

「すごいわ、園子の家の何倍もの広さがあるわ！」

「一体どんな金持ちが住んでるんだ？」

蘭と小五郎が驚きを隠さずに言いあつてている。

「ナンも窓からその広大な敷地を見てみる。

（こりやあ並みの富豪なんか目じやないな・・・うん？）

「ナンは庭の一角に、何か大きな黒い影が見えたような気がした。もちろん、それはＳＰが買い込んだ対空戦車のことだ。

そうこうしているうちに車は屋敷の側に止まる。

扉が開けられると、クラウスが待っていた。

「お待ちしていました。さあどうぞ。」

3人はクラウスについて、屋敷の中へ入つていった。そして再び大いに驚かされることとなつた。

「うわあ。」

「すごい。」

「こりやあ・・・」

屋敷の広さ、大きさ、そして豪華さに感嘆する3人。3人ともこれまで金持ちの屋敷に何回か訪れる機会があつたが、この屋敷はそのどれよりも大きかつた。

そして、4人は主のいる部屋の前に到着した。

「では、私が先に入りますので、皆様はしばらくここでお待ちください。」

クラウスが先に部屋の中へ入つた。

「一体どんな奴がこの屋敷の主なんだ？」

小五郎が口に出した疑問。そしてそれはすぐに判ることとなつた。

凡そ1分後、クラウスが中から出てきた。
「では、みなさん。中へどうぞ。」
3人は部屋の中へ入った。

これ、三井院家へ（後書き）

「意見・「」感想お待ちしています。

ナギVS小五郎？ 戦いはすでに始まっている。

扉がを越え、部屋の中へ入った3人が見た物は、不機嫌な顔をした12、3歳の少女が一人椅子に座っている姿であった。その光景は3人が想像していた物とは全く違っていた。

「ええと？」

小五郎が何か言おうとするが、なんと言つていいかわからずそんな声をだす。

「クラウス、これがお前が言つた探偵か？」

「はい、お嬢様。」

「ふううん……こんな間抜け面なちょび髭男が本当に名探偵なのか？」

その失礼もへつたくれもない言葉に怒りを露わにする小五郎。「な！？ なんだと！？」

その小五郎をなんとかコナンと蘭が宥める。

そして3人はクラウスから衝撃の事実を聞かされる。

「毛利さん、こちらがこの屋敷の主である三千院ナギ様です。」

その言葉に、3人とも開いた口がしばらく閉まらなくなつた。

1分後、ようやく小五郎が言った。

「この、小、いやお嬢さんが屋敷の主ですと…？」

小娘といいそくなつたのを何とか飲み込み、クラウスに確認する。

「そうです。」

まさかこんな子供がこんな大邸宅の主人であるなど、悪い冗談にしか思えない。しかしクラウスの言つている言葉が嘘とは思えない。「ナギお嬢様は弱冠13歳ではあります、間違いなくこの屋敷の

主であり、ゆくゆくは数兆とも言われる三千院家の全財産を受継ぐことになるお方です。」

(マジかよーー)

「ナンが心の中で呟いた。

「そんなことどうでもいいではないかクラウス。それよりも何故私の許可なく探偵を雇つたのだ?ダイヤはこの私が守ると言つたではないか!!」

クラウスに怒鳴るナギ。

「しかしお嬢様。万が一ということもあります。それにです。こちらの毛利探偵は確かに間抜け面かもしませんが、これまでに多くの事件を解決し、さらにはキッドと数々の死闘を交えてきた正真正銘の名探偵ですぞ。」

(事件を解決したのは俺だけだな。)

「ナンが心の中で突っ込んだ。

「つたぐ。わかつた。どうせマリアやハヤテもグルなんだろう。そのおっさんがこの屋敷にいるのは許可しよう。ただし私の許可なくして勝手に歩き回らないようにな。」

おおよそ目上の人を使うとは思えないぞんざいな言葉ながらも、ナギは折れた。とりあえずは第一関門突破である。

「それはそうと、その後ろの2人はなんなのだ?」

後ろの2人とは「ナン」と蘭のことである。

「あちらのお2人は毛利探偵の『家族です。三千院家を見てみたいと仰つたので、別に断わる理由もないからませんので。』

「わかつた。ハヤテ!!!」

ナギが言うと、ハヤテが室内に入ってきた。

「なんでしょうかお嬢様?」

「この者たちを密室へ連れて行つてやれ。」

「はい、お嬢様。では皆さんこちらへ。」

3人はハヤテに従つて部屋を出た。

部屋を出るなり小五郎が早速愚痴を言つた。

「つたぐ、まさかあんな生意氣な餓鬼が当主とはな。」

「お父さんー！」

「幾らなんでも失礼な物言いに、蘭が叱責した。

「すいません。けどお嬢様を許してあげてください。お嬢様は子供のころから常に命を狙われていました。それに、近づく人も殆どはその財産目当てで、だからお嬢様はあまり人のことを信用しない、いや出来ないんです。そして根っからの負けず嫌いですから、ついついあんな口調になつてしまふんです。けど、根はいい子ですから。」

ハヤテがナギの弁護をする。

「へえ、お金持ちも大変なのね。」

蘭がどこなく哀れんで言った。

「えっと、ところであなたは？」

「あ、失礼しました。僕はお嬢様の執事をしている綾崎ハヤテと申します。あ、つきました。こちらです。一応二部屋用意しておきました。お嬢さんとお子さんは左の部屋を、毛利さんは右の部屋を使つてください。御用がおありでしたら、部屋についている電話を使つてください。では。」

そしてハヤテは去つていった。

そんな中、コナンは屋敷に入つてから細心の注意を払つていた。
(もしかしたら怪盗キッドが化けてるかもしけねえし、それにどこかに小細工を仕掛けているかも。)

戦いは始まつていた。

ナギバ小五郎？ 戦いはすでに始まっている。（後書き）

「意見・「」感想お待ちしています。

次回更新予定は明日または月曜日です。

二千院家は危険が一杯！？

「す」「こよコナン君。この部屋だけで家以上の広さがあるわ……」
部屋に入るなり蘭がいつた言葉。

確かに広い。しかも、内装も一級ホテル並みに豪華である。まさに三千院家の財力を見せ付ける場と言つてよい。

「けど蘭姉ちゃん。変だと思わない？これだけの屋敷なのに全然人がいないよね？」

さすがコナン。この部屋に来るまでにしっかり観察を行つていたらしい。

「そういえば、使いの人とか全然いなかつたわね。」

しかし、それならそれでコナンにとつては好都合である。

「蘭姉ちゃん。僕ちょっと探検してくるね。」

「え！？ちょっとコナン君！」

蘭がそう言つより早く、コナンは部屋を出た。

「よし！…おっと、そうだ。」

「コナンは念のため、ボタン型発信機を扉に貼り付けた。そして追跡めがねでその電波が発信されているか確認する。

「ちゃんと作動しているな。」

確認すると、コナンは歩き始めた。

一方、そのころ屋敷外のSPの事務所では。
「屋敷内にて不振な電波の発信を確認！！」
「位置は？」
「客室付近かと。」

「密室！？まさかあの探偵。キッドの変装か？まあいい。すぐに調査に当たれ。」

一〇数分後、屋敷内に派遣されたS.P.A.によりつて、コナンが仕掛けた発信機が発見され、即撤去された。

そしてこれにより、コナンは危機に陥ること。

「ヤベー！一体ここはどこだ？」

コナンは屋敷の中で迷った。ほとんど同じつくりだから、いつの間にか自分のいる位置がわからなくなってしまった。

「まあ発信機の電波を辿れば帰れるからいいか。」

とこゝうわけで、追跡めがねのアンテナを上げ、部屋の位置を確認しようとする。しかし、レンズには何も反応しない。

「え！？何で？？」

正解。すでに撤去されているからです。

「やべー！故障したか？・・・・どうするか？」

どうするかしばらく考え込むコナン。そして導き出された結論は？

「仕方ない、なんとか来た道を辿つていいくしかないか？」

つる覚えではあるが、今はそつするしかない。しかし、そこで振り返ると。

「・・・・・」

10 三ぐらい先に白い虎がいた。

「え！？」

どうしてとコナンが啞然としている間に、その虎はコナンの方に近寄ってきた。

「やばー！」

すぐにコナンは逃げ出した。しかし。

「追つてきた！！」

虎は猛スピードでコナンを追つてきた。コナンはとにかく逃げる。だがもともと大人にだって追いつけるのに、今は子供の体であるコナンに虎から逃げれる道理があるはずがない。あつという間に距離が縮まる。

「だ、だめだ！！」

コナンが覚悟したとき。

「イナズーマキック！！」

掛け声とともに何か黒い物体が虎を弾き飛ばした。

「！？？」

コナンが驚きの目でその光景を見つめた。

「つたく、タマ。お客様にまた迷惑をかけて。」

黒い塊、いや人間だ。その人物は立ち上がりつて誇りを払いながら吹っ飛んだ虎に向かつてそう言つた。

「大丈夫ですか？」

コナンに向かつて振り返つたその男は、さつきの執事、綾崎ハヤテであった。

二千院家は危険が一杯！？（後書き）

次回更新は月曜日の予定です。
ご意見、ご感想お待ちしています。

「大丈夫ですか？ええと・・・」

ハヤテが言葉につまる。まだコナンの名を聞いてなく、知らないからだ。

「江戸川コナンです。ハヤテ兄ちゃん、助けてくれてありがとう。けどまさかトライがいるなんて。」

立ち上がりながら、子供モード全開でコナンは言った。
「いえいえ。けどコナンなんて、変わってるね。まるでどこのホームズ馬鹿が付けそうな名前ですね。」

（ホームズ馬鹿で悪かったな！）

と心で罵るコナン。もちろんこれは彼自身がこの名を考えたからに他ならない。

「けど何どうしてこんな所にいるんですか？確かに密室にいたんじゃ？」

「え！－あの、ちょっと屋敷を探検してたら迷っちゃって。」
取りあえず、子供がしそうな事実っぽいことを言つておく。まさか、この屋敷を調査していたとは言えまい。

「そうなんですか。じゃあ僕が部屋まで送つてあげますよ。」「あ、ありがとうございます。」

こうして、ハヤテがコナンを部屋まで送ることになった。
ハヤテについて歩いていくコナン。そしてその間にも、コナンはさりげなく調査を開始した。

「ねえハヤテ兄ちゃん？」

「なんですか？」

「どうしてこの屋敷には全然人がいないの？－こんな広いなんらもつ

と使用人の人とかがいても良いんじゃない？」

「それはですね、お嬢様が極端に人嫌いだからです。お嬢様は昔から外に出れば遺産目当てで命を狙われていたりしたから。こないだも伊豆で殺し屋に危うく殺されかけたし。そういうわけで知らない人を極端に嫌いするんです。だから普通お屋敷内にいるのは僕とクラウスさん、それにマリアさんぐらいです。」

「マリアさん？」

この時点で、コナンはまだマリアを見ていない。

「ああ、そういえばまだお会いしていませんでしたね。この家のハウスメイドさんです。後で多分会えますよ。」

「うふーん・・・・・あ、あとどうしてあのナギって人が当主なの？親はないの？」

すると、ハヤテはちょっと顔を曇らせた。

「お嬢様の御両親はもう何年も前に亡くなっているんだ。お父さんは物心つく前に、お母さんも5歳のときにな。」

「・・・・・・・」

「ナランは何か聞いてはいけないようなことを聞いてしまった気がした。そこで話題を変えてみる。

「そういえば、ダイヤって一体どんな風なの？」

「ああ、今回狙われているダイヤについてですか？それは言えません。お嬢様に口止めされているのですから。子供といえど話せません。」

ハヤテは話すのを拒否した。

(クソ、子供相手にも言わないなんて。中々口が固いじゃないか。) (と、そこでコナンはあることに気づいた。

(そういえば、この人一体何歳なんだ？)

他の事に気を取られていたからあまり気にしていなかつたが、そ
ういえばこんな屋敷で働いているにはバカに若いように見える。

「ねえ、そういえばハヤテ兄ちゃんは歳いくつ？」

「え！？ 16ですけど。」

さらりと言つたが、コナンは仰天した。

(「げーー！俺よりも若いじゃん！！なのに働いているのーー！」)

まさか年下の人間が働いているなんて。ちなみにコナンの本当の

歳は17である。

「えー！じゃあ学校は？」

「学校はちゃんと行つてますよ。白皇学院。そこの一年生です。」

(名門校じゃねえか。)

白皇学院とは、ナギやハヤテの通う、お金持ちの子弟が沢山入っている学校である。そして日本では他に例のない飛び級クラスが特別に認められているのでも有名である。

(どうなつてるんだーー？この屋敷はーー？)

来てからあまりに常識はずれなことが多すぎる。
そこで、もつとも情報を聞き出そうとした所。

「ハヤテーー！」

ナギの声が廊下に響いた。

小さな名探偵と借金執事（後書き）

意見・御感想お待ちしています。

次回更新は木曜日、または水曜日です。

ナギナギランドへ行けりやーー

「おーい！ ハヤテ！」

やつてきたのは屋敷の主、三千院ナギであった。

「何でしようかお嬢様？」

「うん、あの・・・・・つてそのメガネの生意氣そうな坊主が何故ここにいるのだ？」

（生意氣そうな坊主で悪かったな！）

「ナンが悪態をつく。もちろん心の中でだ。

「どうやら迷子になってしまったようだ。今から僕が密室まで送るところです。あ、ちなみにお名前は江戸川コナン君といつやうです。

「そうか。・・・・・・・・　おい、お前！」

ナギが視線をコナンの方に向けた。

「え、はい？」

「今暇か？」

これは予想外の質問である。

「え！？ 別に用事は特にないけど。」

とりあえずそう答えた。

「よし、だったらお前もついてこい。」

「え！？」

訳がわからないといった表情で答えるコナン。

「あのお嬢様、話の要領が得ないんですけど？」

ハヤテが助け舟を出した。

「あ、すまん。実はな、ナギナギランドを一般にも開放することはないよしつているな？」

ナギナギランドとは、三千院家敷地内にあるナギ専用の遊園地である。もちろん、一般の人間は使えない。しかし、先日いとこの愛沢咲夜から、彼女の遊園地は一般人にも開放していると聞かされ、

自分も負けじとというナギの氣まぐれというか、負けず嫌いな気持ちによつて、一般に開放することが決まったのだ。

そしてそのことはハヤテにも知らされていた。

「はい。けどナギナギランドはそれで今は改裝中では？」
ハヤテの記憶によれば、一般人が入れるように改裝工事に入ったはずである。

「実はその工事が数日前に終わつてな、来て欲しいという連絡を受けていたのだ。どうせ怪盜キッドの予告時間まだ時間もあるし、そこで、この坊主に・・・」

「コナンです。」

坊主呼ばわりされるのも嫌なので、コナンが訂正した。

「・・・・・・・・・コナンにモニターになつてもらいたいのだ。なんならあのもう一人の女も誘つて良いぞ。」

「はあ・・・・・・・コナン君はよろしいですか？」

「え！？まあ暇なんで良いですけど。」

ナギナギランドという物の意味もわからないまま、コナンは場の雰囲気に推され、承諾してしまった。

「よし決まりだな。というわけでハヤテ、30分後に屋敷を出るべ。あの女を呼んでこい、ついでに外へ行く格好に着替えて来い。」

「わかりましたお嬢様。」

そして任務を実行すべく、ハヤテは廊下を歩いていった。

その場にはナギと、訳もわからぬまま承諾してしまったコナンの2人が残された。

「ええと、ナギお姉ちゃん？」

「うん！なんだコナン？」

「ナギナギランドって？」

「わからないので一応聞いてみる。」

「行けばわかる。」

ナギはそう答えるだけであつた。

40分後ナギナギランド

4人はナギナギランドの中央広場にいた。

「すごいですね、屋敷の中に遊園地があるなんて！…」
蘭が感嘆の声をあげる。

「別に凄くないぞ、咲夜や伊澄も持つていい。」

さらつと言うナギ。

「咲夜に伊澄？」

また新しい単語に興味を示すコナン。

「お嬢様のお友達です。」

ナギに変わつてハヤテが答えた。

（プレステ感覚で遊園地を持つなんてどうこう神経してゐんだあんたら？）

コナンが心の中で突っ込む。ちなみに、偶然かはわからないがハヤテも最初来たとき同じことを言つてゐる。

「けどどういう風に回つたりいいのかしら？」

蘭が言つ。

屋敷にあるとはいえ、さすが遊園地、広い！…だからビックから回れば良いのか迷う。

「それだったらもうすぐ案内係が来ますよ。」

ハヤテが気を利かせて言つた。

「え！？」

その答えは一分後に出ることとなる。

ナギナギランドへ行けりやーー（後書き）

連載開始2週間にして1000人を突破しました。読者の皆さんには本当に感謝します。

今後もより良い作品を作るため、御意見御感想お待ちしています。

ナギナギランドへようこそ

「おお、森の妖精たち、本格開業前にお客さんだぞ！…！」

突然後ろから声がかけられる。

コナンが慌てて振り向くと、この手の遊園地には必須アイテムともいえる、着ぐるみキャラたちが立って並んでいた。

「ええと、これは？」

「うん？まあこいつ、遊園地だから、独自のキャラクターぐらい居るわ。ちなみに今話題の中中国の景山遊園地とは違つて完全オリジナルだぞ。」

コナンの問いにナギが答えた。

「よつこいや、僕はここのナギナギランドの森の妖精、ケレ・ナグーレちやんだにゅ……」

一番前のうさぎのキャラクターが喋る

（いや、その名前つてまずくない！特によ供に……）

心の中で叫ぶコナン。

「ところでナギお嬢様、そちらの借金執事君はともかく、その二人はどうぞ今までですか？」

「ああ、今回我が家に来ている探偵の家族、毛利蘭と、江戸川コナンだ。」

（呼び捨てかい！…）

心の中で悪態をつくコナン。

「そうですか。本当に来てくれてありがとうございます……いやありがとうございます。」

（なんか本音が聞こえたぞ！…）

「けど中の人も大変ですね。」

蘭が気遣つて言った。

しかし、ケレ・ナグーレは蘭の肩に手をつけて言った。
「中の人なんていない！……いや、いないんだにゅ！」

「え！？ けど着ぐるみ……」

「僕達はナギナギランドの妖精だにゅ！！」

蘭はこの時、ケレ・ナグーレの後ろに黒い影を見た。
(これ以上突っ込むのはやめておこう。)

蘭がビビッた。

「しかし相変わらずナギお嬢様は小さいけど、そちらのお嬢さんは乗り物に乗れるね。」

「え？」

蘭は辺りを見回してみる。

周りの乗り物は殆ど140cm以下の方はお乗りになれないという看板が目立つ。なるほど、彼女から見たナギは140cmに身長が届くか届いてないかにしか見えない。

実際ナギの身長は138cmだ。

と、そこでハヤテが話しに割り込んだ。

「ちょっと待つてください。今度こそ整備大丈夫でしょうね？ こないだみたいに脱線して外に放り出されるみたいなことにならないで下さいよ。」

「「ええ！！！」

さすがにこれにはコナンと蘭が声を荒げて言った。といふか命に関わる問題だ。そんな事になつたら冗談やギャグでは済まされない。

「ははは・・・・大丈夫。こないだ国土 通省の査察受けてOKもらつたから。」

「だつたらいいんですけど。」

「というわけで、ハヤテ君と蘭さんの2人でお乗りになつては？」

「何！？」

その言葉に敏感に反応したのはナギとコナンだ。2人に怒りのオーラが現れる。

「「ダメ！…絶対ダメ！…」」

「…？」

2人の剣幕にその場の全員が引いた。

「な、なら4人で楽しめるアトラクションをどうぞ。」

ケレ・ナグーレの提案により、4人はファミリー向けのアトラクションを楽しむこととなつた。コーヒーカップやゴーカート。

そして…・・・

「きやあああ！！！」

蘭が悲鳴を上げる。

ナギナギャランドへよつゝそ（後書き）

御意見ご感想お待ちしています。
またオリジナルハヤテファンファイクションの想いの行方も宜しく
お願いします。

ナギの嫉妬とメイドさん

「キヤアアー！…」

蘭の悲鳴が響く。

そこは暗く、そして所狭しとお化けや妖怪が出てくる空間。

そう、ここはお化け屋敷。

「蘭姉ちゃん。そんなに怖がるなら別に入る必要なんてないんじゃない？」

「そこが楽しいのよコナン君。」

「ナンの疑問にさらつと答える蘭。

（つたぐ、女ってのは分からねえな。あっちも。）

そうしてコナンが視線を移した先には、ハヤテに泣きながらしがみつくナギの姿があつた。

「お嬢様。無理せず外で待つていたほうが良かつたのでは？」

ハヤテが気遣つて言うが、負けず嫌いなナギがそんな言葉をすんなりと受け入れる筈がない。

「別に無理などしていない！」

この一点張りである。

ナギは小さいころに体験したある出来事により、暗い所が苦手な体质になってしまった。それは13歳の今となつてもそのままで、彼女の大きな弱点である。なにせ、夜一人で寝ることさえ出来ないのだ。だから、お化け屋敷のように暗いところへ入ることは滅多にない。その彼女がどうして付いてきたのかハヤテにはよく理解できない。

（お嬢様はなんで今回は一緒についてきたんだろう？）

一方のナギの心境はといふと。

(暗いところに入るのはいやだが、あの蘭という女とハヤテと一緒にしておくれのは危険だ。)
というような物であった。

ナギは極端にハヤテが異性と付き合つことを警戒している。これは彼女が、自分こそハヤテの恋人だという自負を持っているからに他ならない。しかし、ハヤテにはそのような考えはない。これは2人が持つてゐる誤解が原因である。

ハヤテは屋敷に入る前、両親の借金を背負つたことにより自暴自棄となり、誘拐をしようとした。幸いこれは警察沙汰になる前に未遂で終わつたが、その時の標的がナギであった。そして彼は彼女を誘拐しようとしてこいつ言った。

「君が欲しいんだ。」

しかし、ナギはこれを告白と受け取つた。

というわけでこのよだな状況になつたわけである。ちなみに、真実を知つてゐるのはメイドのマリア一人だけである。

話が脱線したが、そういうわけでナギはお化け屋敷についてきた。そして幸いといようか4人は何事もなく外に出た。

「もう時間もありませんし、最後に観覧車にでも乗りますようか。既に時刻は3時を回つている。

ハヤテの提案によつて、4人は観覧車に乗つた。

頂上まで上ると、三千院家の敷地がそれなりにわかる。

「へええ、本当に広いお屋敷ですね。あ、あれ湖ですかね？」
蘭が指差して言つた。

「ああ、三千院湖だ。まあ直径2km程と小さいがな。」

(え！小さいの？)

一般人の常識は通用しない。ちなみに湖とは三千院湖のことだ。一方のコナンは、これ幸いとばかりに、三千院家の地理の把握に勤めていた。

(屋敷があそこで、それに・・・)

そんな中ハヤテは、あることを思い出した。

「お嬢様、そういうえば三千院湖にはマリアさんがいるはずです。ついでに迎えにいきましょうか？」

「おおそうだな、この者たちのことも紹介しておきたいし。」

4人は観覧車から降りると、ナギナギランドを出て今度は三千院湖に向かつた。

数分後三千院湖

「ええと、マリアさん？」

4人をそこで待つていたのは。

「あらハヤテ君。」

サングラスをかけ、片手で缶コーヒーを飲みながら立っているメイドさん。その後ろでは、3mはあろうかというヘラブナがピチピチと跳ねながらクレーンに釣り下がった状態でぶら下がっていた。その光景を4人は啞然として見ていた。

ナギの嫉妬とメイドさん（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

新たな少女

「マリアさん。またそれを釣り上げたんですか？」
ハヤテがうんざりといった表情で言った。

「ええ、夕食用の釣りも終わりましたし、ちょっと暇つぶしに。」
明るい笑顔でそう言つマリアを、コナンと蘭はただ呆然と見ているしかなかった。

（この屋敷の中では常識は通用しない。）

2人してそんなことを考えていた。

「ところでハヤテ君、そちらのお一人は今日来られたお客様ですよ
ね？」

「ええ、クラウスさんが依頼した探偵の毛利さんのご家族の蘭さん
とコナン君です。」

ハヤテが2人を紹介した。

「毛利蘭です。」

「江戸川コナンです。」

「マリアです。けどお客様が来たからには夕食は腕を振るわないと
いけませんね。」

マリアが満面の笑みを一人に向けた。その表情に、少しばかりコ
ナンの頬は赤くなる。

（綺麗な人だな・・・・・って俺は何考えてんだー！）

「どうしたのコナン君？」

そんな事もあつたが、こうして5人は屋敷へ戻る。

そのころ、キッド」と快斗はいざ二十一院家に乗り込むべく、出発
の準備を寺井老人と共に

に進めていた。

「グライダーよし、トランプ銃も持った。変装道具もよしと。」

いつもどおりの小道具を揃える。

そんな中、見守る寺井は不安で一杯だった。

「坊ちゃん、今回はやめた方が良いですよ。情報も殆どないのに・・・

・・・それに嫌な予

感がするんです。」

寺井が快斗のことを心配するのは今に始まったことではない。いつものことだ。しかし、

彼自身今回はいつも増して不安だった。

しかし、快斗の方はそんな心配も何処吹く風であった。

「もう、爺ちゃん。おれはもう子供じゃないんだぜ。確かに情報はないけど、予告状を送

つた以上もう引き下がれねえんだよ。大丈夫だって、盗みには失敗

しても、絶対に捕まる

ようなへマはしねえよ。」

いつもどおりのポーカーフェイスで言ひ快斗。

しかし、実を言つと彼自身今回は不安が大きかつた。先ほどの失敗を前提にしているよう

うな言葉からもわかる。

「じゃあ行つてくる。」

「おきをつけて。」

いひして快斗は三千院家に向かつて、颯爽と飛んでいった。

同時刻三千院家

一方三千院家では、ハヤテ・コナンらが屋敷に戻ると、客間で新たな客人たちが彼等を

出迎えた。

「何だ、咲夜に伊澄ではないか。」

そこにいたのは、ナギの従兄弟である愛沢咲夜と親友の鷺ノ宮伊澄のであった。

「おおナギ、お邪魔してます。」

「急に押しかけてすいませんナギ、それにハヤテさま。」

「一体どうしたというのだ？」

今日一人が来るということは、ナギは聞いた覚えがなかった。それはハヤテも同じであった。

「ナギ、怪盗キッドから予告状が来たということのはほんまか？」
咲夜が聞いてきた。

「あ、ああ。なんだ知つてたのか？」

「愛沢家の情報網を舐めてもらつたらあかんで。実はなナギ、その怪盗キッドをうちは捕まえたといんや。」

「ほう。何か盗まれたのか？」

「実はな、今年の夏キッドが大阪で大停電を起こしたんや。その時家の会社もとばつちり喰らつたんや。」

コナンはその話を聞いて、夏の大阪での事件を思い出した。（詳しく述べは映画世纪末の魔術師を御覧下さい。）

「だからその敵討ちをうちはしたいんや。」

「だからって伊澄まで巻き込んで家に乗り込んでくるな！！」

ナギが声を荒げた。

ナギはどうやらかといふこの関西少女が苦手であった。嫌いとうことはないが、そのテンションに時々付いていけなくなる。

「まあまあお嬢様、折角来て頂いたんですし、そこまで邪険にしな

くても。」

「おお、さすがに借金執事は話しがわかるさかいな。
と、」の余話でコナンはある言葉が引っかかった。

(借金?)

一体何のことであるつか?

「ところでナギ、そちらの男の子はどうちらですか?」

伊澄がコナンのことを聞いてきた。

「ああ、クラウスが依頼した探偵の家族でコナンだ。もう一人蘭と
いう女がいるが、そつ

ちは今マリアと一緒に厨房にいる。」

「探偵・・・・・ああ、あのクラウスの爺さんと一緒に飲みつぶれて
た親爺かいな?」

(おっちゃん!……)

心の中で絶叫するコナン。どうやらクラウスと一緒に酒を飲んで
いたらしい。そして

例の「とく飲みつぶれたらしい。

」の如きして、クラウスと小五郎は戦わずして脱落した。

新たな少女（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。なまびたもう一つのハヤテの
「」とくファンフィクション「想いの行方」もよろしくお願ひします。

「ナンが咲夜や伊澄と会っている」、厨房ではマリアと蘭が夕食作りに勤しんでいた。

そして、若い一人の女性のペアであるから会話も弾む。

「へえ、マリアさんってまだ17歳なんですか。」

会話が歳の事に及んだ。その途端マリアの表情が険しくなった。

「そ、そうですけど何か？」

「いや、外見の割りに若いなって。マリアさんってぱっとみ凄く落ち着いてて、もう大人みたいだつたから。」

蘭が笑顔で言うが、マリアの心中は穏やかではない。

実はこのての話題はマリアにとってコンプレックスとなつていた。

だから、普段からハ

ヤテたちは気をつかつてているのだが、もちろんそんなことを蘭が知る由はない。

マリアは会話の内容を変えよつとした。しかし、蘭が話した言葉は意外な内容であった。

「いいな。」

「え！」

どうしてとマリアは思った。

「だって、大人の魅力に溢れているなんて、羨ましいですよ。」

今までこんな好意的な言葉は聞いたことがない。

「そ、そうでしょうか？」

「そうですよ。マリアさんは男の子にもモテるんじゃないですか？」
蘭が何気なく言ったが、これもまたマリアがコンプレックスとしている内容だつた。

「いいえ。何せずっとお屋敷の中にいるのですから。恋愛なんてしたことありません。」

そう、マリアには恋愛の経験はない。以前それをハヤテに灰色の青春とまで言われていた。

る。

しかし、蘭が次に言つたのはまたも意外な言葉であった。

「え、けどハヤテ君とはどうなんですか？お似合いだと思つけど。」

「この言葉に、マリアの鼓動は早くなる。」

「え、何を言つんですか、ハヤテ君とはただ一緒に働いているだけですわ。」

しかし、よくよく考えてみると、確かにハヤテとは浅からぬ縁で結ばれている。しかも、

それなりに魅力も感じている。だが、そこまで考えて、マリアはあることに気づいた。

「確かにハヤテ君は魅力的に思えますけど……けど私は彼のことを好きになつてはいけないのです。」

「え？」

「一体それはどういふことだらう。だが、何か聞いていけないようなことであるのを、蘭

は無意識に感じた。厨房を重々しい沈黙が包む。

その静寂を破つたのは、客間のナギからの連絡であつた。

「おおい、夕食はまだかマリア？」

「二人はここでハツとした。」

「とにかく夕食を作り上げませんか、蘭さん。」

「そ、そうですね。」

恋愛事情は複雑怪奇。

30分後

ハヤテ・コナン達はマリア・蘭合作の夕食に舌鼓していた。

「おいしいですね。蘭さんは中々料理が上手なようですね。」

ハヤテが蘭の料理を讃める。

「ありがとうございます。」

ハヤテに讃められて、蘭は満面の笑顔を向ける。

それに対し、コナンはハヤテに殺意を覚えた。

（蘭の奴、年下相手にデレデレしやがって。）

一方、ナギも同じような心境だった。

（ハヤテの奴、あんな女の方にばつか目を向けて。）

二人してそんなことを考えていた。

もつとも、一人ともそれを心の中に押しとどめるぐらいいの器量は

心得ていた。それに、

そういうことを考えすぎるとせっかくの料理が不味くなる。

そして、確かに蘭の料理は美味かつた。

「ほんまに、蘭さん料理上手いやん。」

「ええ、とてもおいしいです。」

咲夜と伊澄がハヤテの意見に同調した。

和やかな（？）時間が流れしていく。しかし、怪盗キッドとの対決の時は刻一刻と迫っていた。

マニアと蘭（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。また、ハヤテの「J」と「ファン」
フィクション、想いの行方もよろしくお願いします。

「コナン君こっちだ。」
ハヤテがコナンを呼ぶ。一人は逃げていた。その後をナギたちが追う。

「こりあハヤテ！待つのだ！おとなしくこの服を着るのだ。」
その手に、ヒラヒラの女物の服を持ちながら。

ことの発端は夕食の終わりに発生した。

「なあナギ、そういうえばこんな写真があるんやけど。」

咲夜がそう言って写真をナギに手渡した。

「ほう、どんな写真だ？」

そうして写真を受け取る。

「こ、これは……」

ナギの言葉に、ハヤテも覗き込んだ。そして驚いた。なんとそれはハヤテがメイド喫茶でメイドさんをしている時の写真だった。

「なんでこれが咲夜さんの手に！？」

「さっきも言つたけど、愛沢家の情報網を舐めてもらつたらあかんで。」

どうやら隠し撮りされていたようだ。

ハヤテにとつては迷惑極まりない。

しかしことはそれで済まされなかつた。ナギが言つた次の言葉に、

ハヤテの心臓は凍りついた。

「うーん。やっぱリハヤテは女物が似合つた…………なら。」

最後の言葉は小さい声だつたが、ハヤテは直ぐに気づいた。

(ヤバー！)

以前にもこんなことがあつた。案の定ナギが言つた。

「ハヤテ、また女装してくれないか？」

(ほり来た!)

ナギの悪い思い付きである。しかもどびつきの。

彼にとつては迷惑千番、貞操の危機である。

(だれか助けて!!)

と心中で思うが、ことの元凶の咲夜は。

「お、面白そうやな!!!」

と、一発で賛成。経験者のマリアも賛成した。いつなると、味方になりそうなのは伊澄一人。だが、その彼女も。

「私も・・・・ちょっと見てみたいです。」

と言つた。さらに客人の蘭も。

「だつたらスカートは・・・」

と女子高生モードバリバリすでにハヤテの女装計画を練り始めていた。

(うううーーー)

最後にコナンのほうを見たが、そのコナンは知らん振りを決め込んでいた。

そのコナン自身は。

(ふん。いい気味だ。)

と思っていた。

コナンの嫉妬恐るべし。

しかし、火の粉はいつ降りかかってくるかわからない。

蘭がこう言つたとき、コナンの心臓は凍りついた。

「あ、だつたらコナン君にもかわいい格好させちゃいますっ。コナン君もにあいそうですし。」

(何ですとーーー?)

蘭はこれまでに何度もコナンに変な格好をさせようとしている。

その癖が出たようだ。

「お、それもおもしろいわつだな。」

ナギたちも万場一致で賛成した。

「というわけで二人とも男らしく着るのだ。」
「というわけで冒頭の場面に戻る。

「待て！…」

二人はとにかく全力疾走した。さすがにこんな時には反目していない。コナンはハヤテと共同して逃げ切ろうとする。
しかし、相手のほうが数が多い。

「逃がさへんで！！関西人なめたらあかんで！！」

いつのまにか咲夜と伊澄が前に回りこんでいた

「くそ、せめて伊澄さんひとりだけならなんとかなるのに。」

と、そこでコナンは飛び道具を使う事にした。こういうときに使うのはおかしいかもしれないが、それほど切羽詰っていたのだ。
使おうとしたのは今回、博士があらたに開発した3連発麻酔銃である。

「コナンはハヤテにはれない様に照準器を上げ、一人に狙いをつけた。そして、麻酔銃を発射した。

2発とも見事に咲夜と伊澄の額に命中し、その場に一人は倒れた。

「よし！…」

その隙に一人は何とか脱出に成功した。

しかし、コナンは気づいていなかつた。照準器をハヤテに見られていたのを。

逃避行（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。それとハヤテの「J」と「オリジナルファンフィクション」、想いの行方もぜひ読んでみてください。

キッド侵入！！

「レーダーに感あり。」

ハヤテとコナンたちがどたばたしていたそのころ、SPの詰め所は慌ただしくなっていた。

「方位は屋敷への進入コース。スピードは対地速度約60km。エンジン音は一切感知できませんからグラライダーか何かと思われます。高度は約100m。」

屋敷の周囲に設置された対空レーダーに未確認飛行物体が捉えられた。

「進入までは？」

「凡そ2分。」

SPの隊長（独自の設定です）は直ぐに屋敷内へ配備した対空砲や対空戦車に指示を出す。

「全砲撃ち方用意、使用弾種三式対空榴散弾。信管は超低高度爆発の物を使用せよ。」

殺す気満々である。

「進入まで凡そ1分。」

「全周波数帯で警告を促せ。」

「了解。飛行中のグラライダーに告ぐ。それより先は三千院家の敷地を侵犯する。直ちに進路を変更せよ。」

全周波数帯で発信しているから、無線機を持つていれば絶対に聞こえているはずである。

だが、相手は全く動きを変えない。

「目標。進路、速度変わらず。侵入まで20秒。」

「全砲目標が敷地内侵犯をしたら即射撃開始。」

そして20秒後。

ファンファン！！

警報音が鳴る。

「進入しました！！」

「撃て！！」

その途端、配置されていた対空戦車の35mm砲と、20mm対空機銃、そしてSPの持つ自動小銃の一斉射撃が始まった。

快斗は一直線で三千院家日掛け飛んでいた。

そして、目標を捉えた。

「でけえ！！」

彼の率直な最初の三千院家に対する感想である。まあ確かに三千院家はでかい。なにせ湖まであるのだから。

だが、敷地までもう少しと言つところで無線に声が入った。

「飛行中のグラライダーに告ぐ。それより先は三千院家の敷地を侵犯する。直ちに進路を変更せよ。」

彼が使っていたのは警察無線の傍受用無線機だつたから、つまり警察の周波数で言つてきたことになる。それに驚きながらも、はいそうですかと引き下がる快斗ではない。無視して飛び続けた。

しかし、三千院家の敷地に入り、着陸場所を探そうと思った直後、まるで活火山の噴火のように、地面が光つた。

「何だ！？」

と、次の瞬間には周り中で一斉に砲弾が炸裂するか、飛んできた。

「うわー！」

こんな手荒い歓迎など受けたことがない。まああつたらそれはそれで恐ろしいが。

とにかく、快斗が命に危機に瀕したのは確かだ。なにせ35mm砲というのは薬莢が500m⁻¹のペットボトルぐらいある拳銃とは段違いに強力な銃だ。しかも、今回使われているのは榴散弾。これは内部にリンで出来た子爆弾が内蔵されていて、それによつて相手を焼き尽くす砲弾だ。

快斗は懸命によけようとしたが、ついに一発がグラライダーに燃え

移つた。

「ヤベー！」

翼が焼かれたことで、グライダーは揚力を失ってしまい、錐揉みしながら落ちていった。

その様子をSPたちも見ていた。

「やりました。撃墜です。レーダーからも反応が消えました。」

「生死はわかるか？」

「そこまでは。」

「だったら警備ロボの生命センサーの感度を全開にまで上げる。どんな些細な反応も見逃すな。SPの名に懸けて、絶対にキッドが屋敷内に入るのだけは防ぐんだ。」

「了解。」

そのキッドは無事だった。なんとか不時着に成功していた。

「危なかつたぜ。けどなんであんな武器持ってるんだ。」

あやうく死ぬところであった。もつとも、三千院家の非常識などこれはここだけではない。しかしそれを彼が知る由もない。

「とにかく、敷地内には進入できたぜ！！」

快斗は立ち上ると屋敷のほうへ向けて歩き始めた。

じつして怪盗キッドこと快斗は進入を果たした。しかしその前途は多難だった。

キッド侵入！－（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。それからもうひとつの方
ファンション、想いの行方もよかつたら読んでください。

「クソ！」

快斗は全速力で逃げていた。なぜなら。

「侵入者を排除せよ！！」

命の危機に瀕していたからだ。

「しつこいぞここいら！！」

警備ロボット三台が快斗を追いかけている。

快斗は木の陰に隠れたり、トランプ銃の煙幕を使ったりしてまじうと試みたが、その抵

抗は全く意味をなさなかつた。さすがに改良されているだけある。

ロボットはサーモグラ

フィーを使っていたのだ。それをかわそうと思つたらフレアが必要である。

「IJのままじや殺される。」

警備ロボットは容赦なく、装備された機関銃とミサイルで攻撃していく。今はなんとかかわせているが、体力を消耗しつつある。それをかわしきれなくなるのも時間の問題である。

「さあどうしたもんだ。」

頭をフル回転させ、何か妙案を出そうとする。

と、そこで視界が開け、目の前に湖が現れた。その途端、快斗にある考えが浮んだ。

「一か八かだ！！」

快斗はそのまま湖に飛び込んだ。そして沖へ向かって泳ぎ始めた。すると、さすがに警備ロボットも追跡を中止した。三千院湖に不審者が飛び込むなど予

想外だったからだ。

「やつたぜ。」

撤退していく警備ロボを見ながら、快斗に安堵の息が漏れる。

しかし、良いことばかりではない。身を軽くするため、殆どの道具を捨ててしまった。

辛うじてトランプ銃は守りきったが、上着も帽子も、メガネも落としてしまった。さらに、再び岸まで泳がなければならぬ。

「爺ちゃんの予感が大見事で当たつちましたぜ。」

そんな愚痴をこぼしながら、再び彼は泳いでいた。しかし、同時に何かの気配を感じ

た。慌てて振り返ると、何かの鱗が見えた。

水にもぐつて確認してみると、10m大の魚である。それが口を開き直線に向かってくる。

「喰われる！！」

直感的にそう感じ、彼は全速力で泳ぎ始めた。

しかし、ここは水の中。人間と魚では魚の方に分がある。どんどん距離が縮まっていく。

「う、うわああ！！」

もうだめだと思った瞬間。幸運にも魚が追えないぐらいうま淺い所に逃げ込めた。魚はあきらめて沖に戻つていった。

「た、助かった。」

快斗はなんとか岸まで泳ぎ着いた。しかし、もうズタズタのボロボロである。とても動ける体力など残つてなく、彼は力なくその場に倒れこんだ。

そのころ、ナギや蘭たちの追跡を巻くため、ハヤテとコナンは一旦屋敷の外に出ていた。

ちなみに、一人には認識用のカードが渡されているから警備ロボに追われる心配はない。

「とりあえず、ほどぼりが冷めるまで庭でも回らう。」

ハヤテがそう提案し、一人は庭を散歩していた。

そして一人はいつのまにか三千院湖まで来ていた。

と、そこでコナンは、湖の岸边に何やら不審な影を見つけた。

「何だろう？」

時計のライトをつけ近寄る。ハヤテも持っていた懐中電灯をつけたて近寄つてみる。

そして、照らしてみてその正体がわかつた。

「人だ！！」

ハヤテがすぐに声を掛けてみる。

「大丈夫ですか？って若い！！」

自分とほぼ同じ歳程度の少年が倒れていたことに驚くハヤテ。

一方、コナンは別のこと驚いていた。

「ハヤテ兄ちゃん。こいつ怪盗キッドだよ。」

「え！？」

コナンが、トランプ銃を見せながら言った。

遭遇（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。それとくどうじよつですが、ハヤテのごとくオリジナルファンファイクションの想いの行方もよろしくお願いします。

とりあえず、一人はキッドをハヤテの部屋に運ぶ事にした。

ハヤテが担ぎ、「ナンはあたりに注意する。

幸い、SPにも警備ロボにも、そしてナギや蘭たちに接触することもなく、一人はハヤテの部屋に無事たどり着き、キッドを取り敢えずベッドに寝かせた。

「取り敢えずここに連れてきたけど、これからどうじよつか?」

ハヤテとしては、犯罪者を捕まえてからの扱い方など知らない。

「やっぱり警察に引き渡した方が良いのかな?」

実際に真面目な意見である。

しかし、コナンはその意見に真っ向から反対した。

「いや、取り敢えず目が覚めるのを待とう。」

コナントしては個人的にキッドと話をしてみたいと思つていた。

今はその絶好の機会である。

一方、ハヤテもコナンの不審な行動を問い合わせてみたかったし、また確かにキッドと話をするのも面白そうであつた。すでにコナンが彼を調べて特に何も持つていなかつたと判つたから、逃げられる心配もないだろう。

「わかりました。そうしましょう。取り敢えず何か温かい物でも。それに着替えも必要ですね。」

この後、ハヤテがコーヒーや着替えなどを準備した。そして凡そ20分後、ようやくキッドは目覚めた。

「「」、ここは?」

「僕の部屋です、怪盗キッドさん。」

ハヤテの言葉に仰天する快斗。

「な、何だつて?じやあ俺は捕まつたのか?」

「いいえ、別に繩で縛つたりなんかしていません。あくまであなたが倒れていたので保護したまでです。コーヒーをどうぞ。」

と、ハヤテがコーヒーを差し出す。

普段は用心深い快斗も、ハヤテの営業スマイルに特に異の様な物は感じられず、そのままいただいた。

「い、いただきます。」

「いや、しかし。「コナン君が見つけてなかつたら、あなた死んでいたかも知れませんよ。感謝するんですね。」

「え！？」

そこで快斗はコナンがいるのに気づいた。

「そうか、探偵君が助けてくれたのか、礼を言わなくちゃな。」

キッドとしては、いつも会った時のようになに禮を言つただけで特に悪気はなかつたのだが、コナンは彼の言葉に慌てた。

「おい！」

そして、案の定ハヤテが反応した。

「そういえば、「コナン君。君さつき変な照準器付きの時計で伊澄さんたちを倒しましたよね。他にも三千院湖でも小学生にはない注意力で彼を発見した。そして名立たる怪盗キッドさんが探偵と呼ぶ。君小学生にしては不自然な点が多いですよ? 一体何者ですか?」

「コナンはなんとか落ち着いて考えようとした。

(大丈夫だ。黙り込んでシラを切り通せば。)

だが。

「そりやあそうだよ。だつてこいつの正体は高校生探偵の工藤新一だもん。」

快斗があつさり言つてしまつた。

「うわああああ！……！」

快斗も意外と口が軽い。まあ普段ならこいつこいつではないだろうが、常識はずれの目にあつてちょっと緊張感に欠けてしまつたのかもしれない。

「え！」「工藤新一って、あの有名な…？」「、ちよつといじりこいつ」とです！？」

さすがにハヤテのリアクションを見て、快斗も不味い事をしたと

気づいた。

(しまつた。つい口が滑った。なんとか「まかせなきや。」)

「ええと、それはだな・・・・あのなんと言つてよいか。」

しかしパツと言い訳が思い浮かばない。

「どうなんですか？」

「いや、その色々と事情があつてね。いや部外者のあなたにこれ以上言つるのは。」

これでは時間稼ぎにしかならない。

「事情? 一体何なんですか? 事情つて? お一人とも何を隠しているんですか?」

問い合わせるハヤテ。

そんな中、コナンとキッドは。

(どうする。)

(やべ。)

そして、せらり悪いことが重なつた。

「その事情、私たちにも話してくれないか。」

「「「な……」」

3人が振り向くと、部屋の入り口にナギ以下女性陣が勢揃いしていた。

尋問（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

それと3000人突破ありがとうございます。

ただこれより先、作者大学のテスト突入のため更新が滞る可能性
があります。ご了承ください。

そして、想いの行方もよろしくお願いします。

蘭 vs コナン

「お、お嬢様……」

部屋の入り口に立っていたのは、ナギとマリア、そして。

「コナン君。一体どういうことかしら?」

笑顔だが、目が笑っていない蘭の3人だった。

「ええと、蘭姉ちゃん。まさか今の話……」

「全部聞かせてもらつたわよ。」

「コナンにとつては最悪の事態。

「取り敢えず、客間に移動しましようか皆さん。もちろん怪盗キッドさんも。」

「このマリアの提案によつて全員客間に移動。

ちなみに、伊澄と咲夜がいないのはまだ麻酔から覚めていないからだ。

「この移動する間に充分隙をみて逃げれたはずなのだが、結局コナンも快斗も言い訳を考える方に集中してしまい、唯一の好機を逃してしまつ。おまけに、二人とも最後まで言い訳が思いつくことはなかつた。

「で、まずハヤテ。どうしてお前の部屋に怪盗キッドがいたのだ?」「まず最初に問われたのはハヤテ。

「はあ、それは・・・」

ハヤテはありのままを話した。別に彼にはやましいことなど微塵もないのだから。

「わかつた。怪盗キッドを連れ込んだことに問題はないな。まあ逃げた罰として後で女装してもらつがな。」

「ええ……」

結局逃げたことに対するペナルティが加えられることがなつた。次に問い合わせられたのはコナンである。もちろん問い合わせるのは蘭だ。

「コナン君。わざのことは本当かな？あなたが新一って…？」
もちろん、コナンとて事情という物がある。しかし、先にも書いたが言い訳は思い浮かんでいない。というわけで。

「…………」

黙りこくつた。

「沈黙が答えというわけね…………だつたら、怪盗キッド、あなたが言ったことは嘘なの？」

「え！？」

いきなりお鉢が回されてきた快斗。彼もどつしたものか困った。

「…………」

結局かれも沈黙。

「ところで、その新一君と言つのは？」

沈黙を破つて質問したのはマリアだ。

「ああ、新一って言つのは私の幼馴染の…………」

彼女に工藤新一について説明する。

「ええ！…ちょっと待つてください。それだったら歳があいませんよ。」

マリアが常識的な事を突つ込んだ。

しかし、蘭はこれまでに幾度かコナンに疑惑を持ったことを話した。

「けどですね、顔が似ているしそれに今まで……」

加えて、ハヤテが先ほどコナンに聞いたことを言つたため、その信憑性を高めた。

「そういえば、わざ…………」

蘭に先ほどコナンに言つたのと同じことを話すハヤテ。

しかし、やはり一度そういう逃げる糸口となる話題（歳の差）が出ると、コナンは勢いづいた。

「とにかく僕は新一兄ちゃんじゃないよ……だって大人が子供になるなんてありえないでしょ。」

子供モードバリバリで反論する。

「けど、例えば薬でそうなつたとか。」

蘭もあきらめない。

「そんな薬あるわけないじゃん。」

「ナンも逃げる。このままでは埒があかない。このままでは明日になってしまいます。

そこへ、気の利く提案をしたのがナギであった。

「そんなに言つなら、そいつとその新一とか言つ男のDNAを調べれば良いじゃん。なんなら家の病院の機械使つても良いぞ。」

「え……」

この時、ナンはもうだめと確信した。なぜなら照合すれば100%合致するからだ。もちろん、照合には新一の髪の毛とか必要だが、そんな物は家に置きっぱなしのブラシとか探せば絶対に出てしまう。もう逃げ切れない。。

蘭が勝ち誇った顔をした。

「だったら「ナン君。好意に甘えてDNA鑑定しましょうか。いいわよね、あなたが正しければ合致しないんだから。」

いつもは犯人を追い詰めるナンが追い詰められるとはなんという皮肉であろうか。結局ナンはこの後全て包み隠さず喋られることとなる。

蘭バナハン（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

3人の心

結局、コナンは全てを喋った。いや、実際には喋られたと言つた方が正しいか。

とにかく彼はこれまでのことを喋つた。トロピカルランドで起きた事件の時薬で小さくされたこと。黒の組織のこと、そしてやつらの情報を仕入れやすくするため、毛利家に転がり込んだことである。「まったく。私がどれだけ心配したかは、側にいたからわかつているわよね新一？」

すべてをコナンが話し終えた後の蘭の第一声である。やはり眞実を知つた蘭の言葉は少し怒氣を含むものである。

「わかつてるよ。けど、お前を守るためにはしかたなかつたんだ。コナンとしてはそれ以外に言つ言葉がない。それに、どうしても負い目を感じてしまう。

一方の蘭は、表情を堅くしたままだ。相当怒つているのがわかる。彼自身としては、これでもう蘭との仲は修復不能な物になつてしまつたかもしれないと覚悟した。

しかし、蘭は表情を柔らかくしてコナンと向き合つ。

「けど、私のためを思つてそうしていたなら許すわ。それよりも、新一が無事でよかつた。」

そう言つて満面の笑みを浮べる蘭。

その言葉に、コナンは救われる思いがした。そして、その時彼には蘭がまるで女神の様に見えた。

「蘭・・・・・ありがと。」

コナンの顔が赤い。

「私は新一が元に戻るのをずっと待つてゐるから。だから、絶対に元に戻つてよ。」

遠回しであるが、告白に近い言葉。コナンの顔がさらに赤くなる。

「あ、ああ。」

一人の周りの空気はまさに桃色だ。もつとも、見ているナギ、ハヤテ、マリアとしてはあんまり長いこと付き合つてみたいとは思えない光景だった。見てるだけで恥ずかしい。そこで、ナギが話題を変える。

「取り敢えず、コナンのことはわかつたから、次行くぞ。次。」
「というわけで、お次の尋問対象は怪盗キッドである。

尋問するのはズバリ、ナギである。

一方のキッドは自分がこのまま警察に引き渡されないか心配しているようだ。それを、ナギも察した。

「安心しろ。必要なことさえ喋れば警察には引渡しはしない。単刀直入に聞こう、なぜお前は私の屋敷の宝石を狙つたのだ？」

「・・・・・・・・・・

キッドは何も言わない。

「ただのおもしろ半分でか？」

この言葉に、キッドは強く反応した。

「冗談じゃねえ！－好きで泥棒なんかやつてねえよ！－

そう言つキッド。そこへ、会話にコナンが割り込んだ。

「キッド・・・・お前は確かに今まで盗んだ宝石を全て返してきたよな。どうしてだ？そしてお前は愉快犯でもない。一体何が目的なんだ。」

「コナンが問い合わせる。しかし、まだキッドは話そとしない。そこで、ハヤテが言う。

「キッドさん。知られたくない話かもしけないけど、案外話した方が気が楽になるつてこともありますから、話してはどうです？大丈夫、ここにいる人たちはみんな信頼できますよ。僕が保証します。」

お得意の営業スマイルで言うハヤテ。これにはキッドもなんとかだが話す氣になつてしまふ。そして、彼は喋り始めた。

「わかつたよ。俺が宝石を盗む理由は・・・・

キッドは父親のこと。その父親がパンドラという宝石を追つて命を落としたこと、そして今自分は父親の出来なかつたことを成

し遂げようと怪盗キッドをしていくことと、そして父親を殺した犯人を追つていることを話した。

「それは、またすごい重たい話ですね。」

話させてしまつたハヤテに少し罪悪の心が生まれる。しかし、逆にキッドの方は表情を綻ばせる。

「いや、あんたの言つたとおり、逆に言つたことで楽に成つたよ。快斗自身不思議と落ち着けた。もしかしたら彼はこのときを待つていたのかもしない。

「しかしお前たち3人はよくそんな人生送つていられるな、感心するよ。」

ナギが誓めているのだから、バカにしているのかよくわからない台詞を吐く。しかし、コナンとキッドには3人という言葉が気になつた。

「「3人?」」

「ああ、ハヤテのことだよ。ハヤテは去年のクリスマス、親に一億五千万の借金を押付けられて、借金取りに売られてしまつたんだからな。」

その言葉に、コナン、蘭、キッドの3人はただ驚くしかなかつた。

3人の心（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

パンドラ

ハヤテの過去についての話を聞き終えた時、コナン、キッド、蘭の3人は驚きを隠せなかつた。まあ16歳の少年が一億以上の借金をしているなど、予想するほうが難しい。

「すげえ！！」

「本当に人身売買って存在したんだ！！」

「かわいそう！！両親に売られちゃうなんて。」

それらの言葉に対し、ハヤテは苦笑いした。

「ハハハ・・・・まあそりやつて労わつてもらえるだけでもありがたいです。」

顔は笑つているが、言葉の所々に何か恨みや寂しさの様な物が感じられる。そのため場の雰囲気が一気に暗くなつてしまつた。そこで、話を先に進める意味も含めて、ナギが話題を変える。

「まあそれはそれとして。で、キッド。いや本名は快斗だったな。快斗、もし私の宝石がそのパンドラだつたらどうする気だ？」

ナギが聞く。それに対し、快斗は少し複雑な表情をする。

「それはまあ、最初は粉々に碎くつもりだつたけど・・・」

しかし、それは困るのだ。なぜならダイヤはナギにとつて数少ない母からの形見であるのだ。それを知つているハヤテやコナンは厳しい視線を向けている。ちなみに、快斗は既にその説明を受けている。

「取り敢えず現物を見ないことにには・・・」

とりあえずそう言つてお茶を濁す快斗。

「まあそれもそうだな。とりあえずお前に見せよ。シラヌイ！」

ナギに呼ばれ、一匹の猫が現れた。

「ニヤアアー！」

シラヌイはナギの膝の上に飛び乗つた。

最初他の人間はなぜ彼女がシラヌイを呼びつけたのかわからなか

つた。しかし、すぐにその首元に小さな袋が掛けられているのが見えた。

「お嬢様。シラヌイを持たせていたんですか？」

「ああ、こいつなら勝手に歩き回ってくれて、わざわざ机の間に隠す必要もないからな。」

そしてナギは袋からダイヤを出した。

「さあ、見るといい。」

快斗にダイヤを渡す。

「あ、ありがと。」

受け取ると快斗は窓際に行く。今日は晴れでいてちょうど月が出ている。その月に、彼はダイヤを齧る。結果は直ぐに出るはずだ。

全員がその様子を固唾を飲んで見守った。

そして、数秒後快斗が言つた言葉は・・・・・・

「パンドラだ！..」

その言葉に、全員複雑な心境になる。

「これで快斗君の目的が達成されたわけね。けど・・・・」

そういう蘭はちらりとナギの方を見る。

「・・・・・・・・」

ナギ自身は押し黙つて何も言おうとしない。

そこで口を開いたのはハヤテであった。

「快斗君。どうかその宝石を割らないで欲しいんだ。それはさつきも言つたけど、お嬢様が5歳のとき亡くなつたお母様の数少ない形

見。だからお願ひします。もし君がナギお嬢様がその宝石を悪用する不安に思ひうなら、それは絶対無いと僕が保証します。

続いてマリアも言つ。

「私からもお願ひします。ナギは確かにわがままで自分勝手で負けず嫌い、学校にもあまり行かないHIKIKOMORIですけど、根は優しく、物的道理はわきまえています。だからお願ひします。」前半の言葉にナギはムツとしたが、まあ一応後半で誓めていろ」と、場が場なのでナギは何も言わなかつた。

一方の快斗はしばらく何事か考えていたが、直ぐに振り返つて言った。

「わかりました。お一人の言つことを信じましょう。それに、俺にはその娘の思い出を人々にする権利はないので。」

快斗はナギの側に寄つていき、そして宝石を返した。

「ありがとう。」

しかし、懸念はまだあつた。

「けど、その宝石を狙つて他の連中が狙つてくるんじや？」

その懸念を言つたのはコナンである。

しかし。快斗が否定した。

「いや、他の人間に言わなきゃ大丈夫だつて。それに、この屋敷の警備網を掻い潜れる奴なんていないと思つ。」

つい先ほど痛い目に遭わされた快斗の言葉には重みがあつた。そして間もなくSPの事務所から連絡が入つた。その内容が事態を思ひぬ方向に持つて行くこととなる。

パンドラ（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

不審者

S Pの事務所からナギの携帯に連絡が入った。

「私だ、どうした。何かあつたのか？・・・うん・・・何！不審者を捕まえた。ちょっと待ってくれ！」

ナギは会話の内容を部屋全体に聞こえるよう接続しなおす。本當なら別にその必要はないのだが、なぜかそうした。そして、これが結果的には大正解の行動だつた。

「いいぞ。続きを話してくれ。」

ナギの言葉と共に、S Pの隊長が報告を始めた。

「では申し上げます。侵入者は計5名。いずれも真っ暗な装束を着込んだ屈強な男です。塀を越え侵入したところを警備ロボットがミサイルと機関銃で攻撃、屋敷への侵入を阻止しました。結果1名重体、残る4名も大なり小なりの怪我をしています。重体者は先ほど病院へ送りました。ですがね、こいつらちょっと変なんです。」

最後の言葉をS Pの隊長が怪訝な声でそう言つた。

「変？何が変なのだ？」

「はい。全員口の中、正確には歯の中に、毒を仕込んでいたんですよ。おそらく猛毒の青酸カリと思われますが。強くかむと弾ける仕組みだったようで。もちろん噛む前に抜き取りました。」

と、そこでコナンが強い反応を示した。

「何！？」

いきなり大きな声をあげたコナンに驚く蘭。

「どうしたのよ新一！？」

「いや、以前飛行船で起きた事件で組織の奴に会つた事があるんだけど、そいつは歯に仕込んだ毒で自殺したんだ。」（詳しくはコナン特別編26巻）

ということはまさか？先ほど一人の話を聞いていたナギは、すぐに氣の利いた質問をする。

「おい、そいつらは何か持つていなかつたか？」

「すぐに、ＳＰの報告が帰つてきた。

「はい。武器らしい物はナイフとスタンガンと言つた、おおよそ殺傷能力の低い物を持つていました。あとはピッキングの道具やら、主に盗難に使う物ばかりです。ただ・・・・リーダー格と思われる男が不審な薬を持つっていました。」

ナギはその言葉を聞き逃さなかつた。

「薬？」

「はい。カプセル錠なんですが。ただの薬ではないようで、明らかに怪しかつたので、今科学班へ回して解析を急いでやつて貰つています。」

ここまで会話を聞いてコナンと快斗にまさかという思いが走る。そして二人が会話に割り込んだ。

「その男の特徴は？」

「何か言わなかつたか？」

いきなりの乱入にＳＰは大いに驚かされた。

「うわ！－いきなり回線に乱入しないで下さい。ええと、男は全員暴れたため今は鎮静剤を打つて寝かしています。特に何か言つた様子はありません。ただ顔については今からそちらに画像を送るので見てください。後、警備ロボットのレコーダーも一度調べて見ます。後ほどそちらも報告しますので。恐らく30分もすれば終わると思うので。では、一旦ここで切ります。」

こうしてＳＰの報告は終わつた。すると直ぐに、部屋のテレビに画像が送られてきた。

それを快斗とコナンは見る。そして、1人の男を見た途端、快斗が声を上げた。

「こいつスネイクだぜ！－間違いない！！」

なんと、その男は快斗の宿敵、そして父親の仇のスネイクだった。

「コナンの方はどうだ？」

ナギがコナンに聞いてみる。しかし。

「いや、俺には見覚えはない。けど、さつきの薬が氣になる。」

もしかしたら、APT-Xかもといつ予感がする。

「まあ家の科学班に回したのなら、多分1時間もすれば結果が出るぞ。」

「ええ！」

そのナギが言つた言葉にただ驚く一人。そんなに早く解析を終えるなど警察でもFBIでも不可能だ。

信じられない！！といわんばかりの二人に、ハヤテがこう言つた。
「ここでは世間一般的の常識は通用しないと思った方が良いですよ。」
一人はその言葉にただ納得するしかなかつた。

不審者（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

スネイク

10分後、S.Pの事務所から再び連絡が入った。

「リーダー格と思われる男が目を覚ました。いかがいたしました？」

「どうやらスネイクが目を覚ましたらしい。

「よし、だったら直接やつに聞いてやる。」

そう言って立ち上がったのは快斗だった。どうやら父親の殺した相手と直接話したいようだ。

それに続くように、他の人間も席を立つ。

「ようし、私もそいつから侵入した理由を聞き出してもいいわ。」

「お嬢様がいくなら僕も。」

「じゃあ俺も。」

「私も行くわ新一。」

結局、最終的にハヤテ・ナギ・コナン・快斗・蘭の5人で行くこととなつた。ちなみにマリアがメンバーの中にいなのは、麻酔針を喰らつてまだ眠っている咲夜と伊澄が起きた場合に備えて残るからだ。

というわけで、5人は屋敷のはずれにあるS.Pの詰め所へと向かった。

そこで最後の最後。ハプニングが起こるといつ事も知らずに。

一方、目を覚ましたスネイクはといふ。

(どじつたぜ。)

今の彼は縄で両手を縛られ、口には舌を切つて自殺しないよう猿轡が噛まされていた。

(せめて拳銃さえあればあんな無様な真似をしなかったのに・・・)

今回、の方の指示で持つことが許された武器は殺傷性の低い小型ナイフだけで、後はスタンガンのみ。防弾チョッキや音響闪光弾の携行は認められたが、そういうのは防御用の物で、今まで手荒い方法でやつてきた彼にしてみれば物足りないの一言である。しかも、誰一人として殺してはいけないという条件まで課せられてしまった。まあ、これだけであの方がどれほど三千院家を恐れているかがわかるのだが、スネイクとしては一度やると決めたことをここでやめるわけにもいかず、最精鋭の部下を引き連れ三千院家に赴いた。

もつとも、結果ははっきり言って片道攻撃の、いわば特攻になってしまった。進入した途端、警備ロボットの機関銃とミサイルの集中攻撃を受け、全員屋敷に近づけぬままやられてしまった。もし防弾チョッキを着てなかつたら、恐らくスプリンター（破片）で体をズタズタに裂かれててしまつていただろう。

警備ロボットの攻撃が終わつた後はあつという間にSYPに包囲され、全員捕まつてしまつた。相手の数はこちらの5倍はいたであろうし、おまけに全員小銃を持つた完全武装であつた。勝てる筈がなかつた。

さらに悪いことに、自決用の仕掛け歯を噛む前にSYPに強打され、そこで気絶してしまつた。

田を見ましたときには、今の状況となつていた。正に最悪の状況である。

(やでどうした物かな?)

このまま警察に引き渡されても、おそらく組織に暗殺されるのがおちである。かといって今の状況から脱出するのも不可能であつた。どつちに転んでも最後には地獄行きであつた。

(なんとか脱出できる方法を)

思案してみると、いい案がパツと出るはずがない。

と、そこで部屋の外が賑やかになつた。

(警察か!?)

しかし、それは直ぐに間違えとわかった。なぜなら明らかに若い男女の声が聞こえてきたからだ。

ちなみに今彼がいるのは刑事ドラマで良く見る取調べ室の小さな部屋だ。

「、そこにあることに気が付いた。」

（繩の結びが甘い！チャンス！）

彼は手を器用に動かして繩を解きに掛かった。そして、繩は10秒ほどで解けた。

（よし！）

そして、やうに都合のいいこと、このような会話が聞こえてきた。

「じゃあ入れてくれ。」

「賛成できませんが、お嬢様の頼みなら仕方がありません。」

明らかに10代ぐらいの少女の声。しかも中に入ってくるらしい。

（まだツキは落ちちゃいねえぜ。）

そして、部屋の扉が開いた。

スネイク（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

ハヤテ達一行は、スネイクが閉じ込められている部屋の前までやつてきた。

「では開けてくれ。」

ナギの言葉と共に、SPが部屋の扉を開ける。

「あんまり気は進みませんがね。」

ブツブツ文句を言いつつも、命令は命令なのでヒヤは扉を開けた。「どうぞ。」

SPの先導を受けて、ナギが最初に部屋の中へ入った。

だが、ここで全員が全く予想していなかつた事態が起きた。

縄で縛られていたはずのスネイクが、縛られていた椅子から立ち上がつたかと思つた次の瞬間、SPが腰につけていた拳銃を奪つた。

「何！？」

そしてその勢いをつけたまま、ナギに拳銃を突きつけた。そして、その片腕を首に回して拘束する。

「お嬢様！！」

「ナギちゃん！！」

「「あ！！」」

全員が驚いているのを尻目に、スネイクはあっさりとナギを人質に取つてしまつた。

「全員その場を動くな！！少しでも動いてみる、このお嬢ちゃんの頭に風穴が開くぜ！！」

スネイクが勝ち誇った顔をする。

もつとも、コナンたちとて何も考えていないわけではなかつた。

「ナンは時計型麻酔銃をいつでも撃てるようにする。」

それに気付いた快斗は、コナンが撃てる体勢を作るまでの時間稼ぎを始めた。

「スネイク、相変わらずやることが汚いな。」

快斗のその言葉に、スネイクは強く反応した。

「何で俺の「コードネームを！？」まさか、お前が？」

すると、快斗はいつもの怪盗キッドの不適な表情をする。

「そうです。私が怪盗キッドですよ。」

その台詞に、スネイクは一瞬驚いた表情をしたが、すぐに元の顔に戻る。

「ほう。変装ではないようだな。そういうえばあの男（盜吉）には息子がいたな。つまり父親の跡をついだって事が。あの男も中々いい息子を持つたようだな。」

「ふん。スネイク、どうせ無駄だ。おとなしく投降しろ！」

とりあえず駄目元で説得してみるが、そんな説得にのるようでは悪党とはいえない。

「ここで投降したところで、殺されるのが落ちだからな。こうなつたらとことんやるまでよ！」

全く聞く耳を持たない。

「あなたを殺すとするならジンか？それともベルモットか？」
さらなる動搖を誘うべく、今度はコナンが言った。

「何！坊主、お前何者だ！？ただの小学生ではあるまい。」

「江戸川コナン探偵だ！！」

一応本名は隠しておく。しかし。

「コナン・・・・ああ、確か毛利探偵事務所に居候して、キッドを打ち負かしてきたな。最近組織が色々調べて、もしかしたら工藤新一の幼児化した姿だなんて説が出たな。よくあるコタ話かと思つていたが、どうやら真実のようだな。」

コナンとキッドはここで重要な情報を手に入れた。なんと組織はもうコナンの素性を大分掴んでいたようだ。

一方、スネイクの方も動搖するどころか、逆に自信を深めた。

「しかし良い話を聞かしてもらつたぜ。それだけの情報をもつて帰れば、今回の失敗は帳消しだぜ！」

しかし、そこで一瞬気が緩んだ。すかさずコナンがその隙をつい

て麻醉銃を撃ちこんだ。

「うーー」

麻酔針が命中してぐつたりとなる。

「あ……」

全員がそろつてそんな声を上げた。そして表情からまざい事態が

ミサニノハナシ

なせそなつたのか？麻酔金か当たつて眼にこいたのは、
イクではなかつたからだ。

「九」

「ナン、もう一発!!」

今ので最後だ！！

実は、連發可能とは言ひ、でも、せうほん小さな腕時計の容積など
示すが如きである。3巻の『装薦』を見ていなうつて、矢又二郎登場

一発ずつ。そして今のが最後であった。

ピンチ！！

応酬（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

逃亡者

「ナンがスネイクを狙つて撃つた麻酔針が、こともあるうにナギに当たつてしまつた。これは撃つたナンやそれを見ていた快斗たちにとつても大きな誤算であつた。

もつとも、予想外の事態に困惑したのは、ナギを人質にとつていたスネイクも同じであつた。

考えてみれば、ナギが眠ってしまったということは、ナギは自力で立つていれないという事に他ならない。つまりスネイクは彼女が倒れないように支えなければならない。 30 kg もない彼女といえど、やはり重荷になるのは変わりない。これでは人質としての価値はなくなり、それどころか余計な荷物を背負い込んだに等しい。

(それでどうしたものがかな?)

アクシデントはつき物とはいえ、こういう事態はあまりない。スネイクはしばし考え込む。しかし、さすがに場数を踏んでいる悪党だけある。すぐに切り抜ける手段を考えた。

નુદી

スネイクは最大限の力を込め、抱えていたナギを投げ出した。投げ出した方向には、コナンと快斗が並んでたつていた。

—あ！」「

いきなりの予想外の行動に声を上げる一人。だが、すぐに彼女を受けとめようとした。が。

お嬢様！」

執事としての性か、ハヤテが素早く動いてしまった。もちろん、その動いた先には「ナンと快斗が立っていたから、結果は・・・ゴーン！」

ゴーン！！

大見事に3人が衝突し、そして倒れこんだ。さらに悪いことは重

バター!!

ナギが倒れた3人の上に折り重なるように倒れこんだ。

「「「ゴフ！！！」」

3人、特に一番下に倒れている快斗にすさまじい力がかかった。（ハヤテ+コナン+ナギ）3人ともしばらく動けなくなってしまった。それを見ていた蘭もSPも唖然としてしまった。

その油断を突いて、スネイクは逃亡した。

「あばよ！」

「あ！あいつが逃げちゃう。ちよひと脚起きなさいよ！…」

蘭の叫びがむなしく木霊する。

「作戦成功！…」

一方、勝者の笑みを浮かべ逃げ出したスネイク。あとはここから逃げるのみ。

SPも追いかけてくるが、狭い場所で銃を撃つて兆弾になることを恐れているのか、銃撃はない。

もはや彼を止める者はないのか。

しかし、スネイクの幸運もここまでだつた。

角を曲がったところで、突然後頭部に衝撃が走つた。

バシ！…

「痛え！！何だ！？」

慌てて振り返ると、さつき人質にしたのと同じぐらいの少女がハリセンを持つて立つていた。咲夜だった。ようやく目覚めた彼女が馳せ参じたわけだ。そして騒ぎを聞きつけ、ハリセン持つて待ち伏せていたのだ。

「関西人をなめたらあかんで！…！」

関西弁丸出しで言う少女。しかし。

「つて無視かいな！…」

スネイクはそんなもの無視して再び走り出した。かまつている余裕など、一秒もないのだ。

まだ後頭部が痛い。

「つたぐ、最初のロボットといい、この屋敷はどうかしてるぜ！…

！」

愚痴をこぼしつつも、とにかく屋敷からの脱出のため、スネイクはひた走るのであった。

逃亡者（後書き）

御意見・御感想おまちしております。

波状攻撃

「一体どうなっているんだ？この屋敷は？」

場数を踏んできたスネイクではあるが、こんな異常な状況初めてである。

「もしかして、あの方はこのことがわかつていたのか？」

それならば侵入することを中々許可しなかったのも頷ける。もつとも、本当の理由は違うが。

とにかく、咲夜のハリセン攻撃にもめげず、彼はとにかく逃げる。しかし、再び異常な状況が彼を襲つた。

目の前に少女が現れた。しかも、その少女は今となつては珍しい和服を着ている。

「今度はなんだ？」

と、その少女が袖から何やら出すのが見えた。お札ぐらいの大きさの紙だ。そして、その紙を手に持ち、こちらに向けてきた。

ここで、ここまで異常な状況の連続から、彼の直感が働いた。少しばかり体を右によける。

その瞬間。

「八葉六式・・・・撃破滅却。」

少女・・・伊澄が呪文を唱えた途端。凄まじいエネルギー波が彼のさつきいた場所に襲い掛かつた。もちろん、スネイクは寸前にかわしていたから無事である。エネルギー波はその後ろの壁を破壊するだけに終わつた。

「うおおおお！」

そんなバカな！と思ひながら叫ぶスネイク。

「あ、外しましたね。」

一方の伊澄は、さらりと表情一つ変えず言つたが、はつきり言つてしまになつていない。なぜなら服の袖がこげている。もしあの時避けていなかつたら、確実に大怪我していただろう。

「冗談じゃねえぜ！！」

再び全速力で逃げるスネイク。

今まで危険な場所に身を置いてきたが、ここまで死を直感したことはなかつた。

「とにかく一刻も早く脱出しないと、殺されちまう。」

今までさんざん人を殺してきている彼だが、武器がなければ情けないほど弱い。まあ肉体的にも強いのだが、あいにく三三院家ではその強さのレベルが尋常でなかつた。

彼は再び出口目指して走り始めた。

すると、またしても予期せぬ事態が。

「勘弁してくれよ！」

目の前に現れた若いメイドさんだつた。

「しかし、相手がメイドさんなら大丈夫だろ？！」

今回は余裕の笑みを浮かべる。そのメイドさんをスルーしようとした。しかし、すさまじい衝撃が彼を襲つた。

「うわあああ！…！」

そしてそのまま投げ飛ばされた。地面に叩きつけられるスネイク。

「な、何だ今のは！」

よろめきながらそういう彼。

その答えをしてくれたのは、彼を投げ飛ばしたメイドさん……マリアだつた。

「ただの形意拳ですわ。護身術程度の浅学ですから不意打ちぐらいにしか使えませんが。」

油断した。まさかメイドさんがそんな技を使えるなんて。

「もう逃げても無駄ですよ！死にたくなかつたら、おとなしく投降したらどうです。」

マリアがなんとなく恐ろしい感じの言葉を混ぜた投降勧告をしてきたが、あいにくとまだスネイクは諦めていない。

「御忠告ありがとうメイドさんよ。だが、あいにくと悪党つてのは諦めが悪くてね！…じゃあな。」

「冗談じゃねえぜ！…！」

というわけで再び逃走。そしてもなく建物内からの脱出に成功した。

辺りを見回すが幸いSPの姿はない。しかも、都合のいいことに目の前には自動車が何台かならんでいた。SPたちが屋敷内の移動用に使うジープであった。さら車内を見てみると好都合なことに鍵がささつたままだ。

「ラッキー！」

彼はその内的一台に乗り込んだ。急いでエンジンをかける。エンジンが掛かったところで、建物内からわらわらと人が出てくるのが見えた。すかさず、アクセルを踏み、その場から逃げる。その様子は、追いついたハヤテやコナンからも見えた。

「　　しまった。」

延長戦の突入であつた。

波状攻撃（後書き）

御意見・御感想お待ちしています。

スネイクが車で逃走した直後、コナンやハヤテたちが建物内から出てきた。

彼らの目に入つたのは、走り去つていく車であった。

「畜生！車を使って逃げたか！」

コナンが吐き捨てるように言った。

「自転車はないですか？」

他の人からすれば一見意味不明なハヤテの発言。もつとも、マリアラハヤテをよく知つているものならその意味はすぐにわかる。ハヤテの体力は化け物なみだ。なにせ夜の首都高を屋形車を引いた通常型の自転車で80kmのスピードを叩き出せるのだ。だが、あいにくとSPの詰め所には自転車は置いてなかつた。走つて追いかける手もあるが、さすがに疲れるので必殺技を使う前には遠慮願いたいものである。

「残つている自動車を使えばいいじゃないんでしょうか？」

意外や意外。そう意見を言ったのは伊澄であった。

さつそく、SPたちをせかして車を出させようとする。残つている車は5台。しかし、こぞ動かそうとする、それは問屋が卸してくれない事態となつた。

「大変です！タイヤがパンクさせられています。これでは動けません！」

5台中4台のタイヤが銃によつて撃ち抜かれていた。これでは動かせない。

残る1台にしても、4人乗りだから定員オーバーだ。

「何か代わりは！？」

そこで、快斗が駐車場の片隅にサイドカーがあるのに気付いた。これなら運転経験もあるから使える。（ちなみに、サイドカーは通常のバイクより運転しにくいといいます。）

「これ使えますか？」

S Pの1人に訊ねる。

「ああ。」

さつそく快斗が駆け寄る。すると、以前一緒に乗った経験があるコナンも急いで駆け寄った。

ところが、近づいて見ると意外なことがわかつた。

「何だこれ！機関銃が付いているぞ！それにこいつは相当な旧式だ！」

「コナンが驚きの声をあげた。

側車の前面に機関銃が取り付けられていた。それにバイク自体、まるで映画に出てくるような古めかしい物だ。

すると、後から来たS Pが説明した。

「それは旧日本陸軍の1939年式側車型陸王です。以前帝様が趣味で集めた物をレストアしたもので。機関銃は96式7・7mm軽機関銃で、いつでも撃てるようにしてあります。」

なんと旧帝国陸軍のバイクであった。確かに注意してみると、側車の前には星マークがついている。

と、武器がついていると聞いたことでハヤテが寄ってきた。

「だったら僕が側車に乗ります。機関銃の扱いには慣れているので。

」

そう言つやいなや、側車にハヤテが飛び乗る。

「機関銃の扱いに慣れてるって……」

「コナンと快斗が啞然とした表情でハヤテを見る。

「2・3年前に歳偽つてフィリピンで傭兵やってましたから。拳銃、小銃、機関銃、大砲、携帯式のミサイルならひとつうり使えます。」

さらつと言つが、もちろんあまりに常軌を逸脱した発言である。

「コナンも快斗も開いた口が塞がらない。」

そんな状況下で、S Pがやつてきた。

「みなさん。連絡用のインカムをつけてください。じゃないと不便ですから。」

そこで我に返る二人。ハヤテを含めた三人はそれを頭につける。こうして色々あったが、ようやくスネイクを追いかれるようになつた。

バイクにはハヤテと快斗。車には運転手のヒロと「ナン、蘭、マリアが乗り込んだ。

咲夜と伊澄は眠りこけているナギの付き添いで残る。

「ようし、じゃあ行くか！！」

エンジンを掛けた快斗が威勢良く言つた。

しかし、ここで全員重要な事を忘れていた。それに気づいたのは

ハヤテだった。

「そういえば、あの人。どこに逃げたんでしょうか？」

「「「「「あ……」「」「」「」」

追跡（後書き）

御意見・御感想お待ちしております。

二十一院飛行場（前書き）

ええ、感想で指摘がありましたが、この作品では原作にない、作者オリジナルの設定が何箇所かあります。ご注意ください。

二千院飛行場

「ええと、わかりました。奴は屋敷の北へ向かっています。」

スネイクが何処へ逃げたかわからず混乱した一同であつたが、直ぐに事務所のSPがスネイクの乗つた車に積まれているGPSから逆探知して報告してきた。

「よし、それじゃあ取り敢えず北に向かうか。」

エンジンを吹かし、快斗はサイドカーを出した。コナンたちの乗つた車も後を追う。

「けど屋敷の北になにがあつたかな？」

ふとそんなことを呟くハヤテ。彼自身、屋敷の北に何か外へ逃げられるような施設があつた覚えは殆どない。だからハヤテにはスネイクが北へ逃げる理由が見つからない。

「そうですね、屋敷の周りは高いフェンスに囲まれていますし、それぞれの門にはSPが張り付いているから、脱出する方法なんてないんですがね。」

SPも首をかしげている。

そこへ、再び事務所のSPから無線連絡が入つた。

「わかりました。奴は一番北の二千院飛行場に向かっています。」

「…………飛行場！！！」

SP以外の全員がほほ揃つて驚きの声をあげた。

「え！？この屋敷に飛行場もあつたんですか？」

そんなのハヤテも聞いた覚えがなかつた。（実際原作にはありません。作者のオリジナルです。- 作者注）ヘリポートは何度も使つてゐるからわかっている。しかし飛行場があることは知らなかつた。

「有りましたつけ？」

屋敷に長く住んでいるマリアも首をかしげた。

その疑問にはSPが答えた。

「有りますよ。屋敷の一番北端で、ここ最近、少なくとも10年以

上使われていません。帝様がかつてこの屋敷に住んでいた時、趣味で集めたレシプロ機を置いておくのに作らせた飛行場です。そんなわけで滑走路も短くて使い勝手が悪いので、ナギお嬢様さえ多分使つたことはないでしょう。確かに今は飛行場維持に最低限の人間がいるだけです。」

ハヤテは帝の趣味に呆れると共に、どうしてわからなかつたか理解した。何せナギが遠距離移動で主に使うのはヘリコプターで、それも屋敷に近いヘリポートを使つてゐる。知らないはずだ。

「てことは、奴は飛行機を奪つて空へ脱出する気か。」

コナンの言葉が全員のインカムに入る。

「そうですね。飛行場自体は最低限の人員しかいないとはいえ、いつでも飛行機は飛ばせる体勢は整つてゐるはずです。機体の状況もパーフェクトに维持されているでしょ？」

「急ごう！」

SPの言葉を聞いた快斗はさうにスピードを上げた。

20分後。一行は飛行場に着いた。

三千院飛行場は800m程の滑走路を持つ小さな飛行場だつた。だが綺麗に手入れされていて、いつでも使えそうである。辺りは静まりかえつており、人の気配はない。

「いないな。」

「いないわねえ。」

「GPSでの追跡は？」

コナンがSPに聞いてみる。しかし、彼は首を横に振つた。

「あちらも気付いたみたいで、10分ほど前に電波が途絶えたそうだ。多分車載の発信機の電源を切つたようだ。」

これでは機械の目はもつ頼りに出来ない。

「しかたないですね。格納庫を一つ一つしらみつぶしに探ししましょう。」

ハヤテが提案したが、案の定。

「――「えええ！――！」」

不満の声が出た。格納庫は飛行場の周りに10個ほどある。これを全部探していたら朝になってしまふ。いや、現実問題日の出まであと20分ほどしかなく、すでに東の空は明るくなっている。

「えええ！――と言われても、他に方法ありますか？」

そう言つと、全員押し黙つてしまつた。妙案がパツと出れば苦労しない。

と、その時。

ババババ・・・・・

エンジン音とプロペラ機独特のエンジン音が辺りに響いた。そしてインカムには。

「いらっしゃら飛行場管制塔！5番格納庫の機体、エンジンの始動を確認――」

二十一院飛行場（後書き）

御意見・御感想おまちしています。

疾風の如く！

バババ・・・・・

プロペラ機独特のピストンエンジンの音が暁の飛行場に響き渡る。

「5番格納庫はあれだ！！」

コナンが指差した。

全員がそちらに目を向けた。

その格納庫の名からプロペラを回した飛行機が一機出てきた。キヤノピーの大きさからして1人乗りだ。既に明るくなり機体の色まで分かる。薄い緑色に塗られ、胴体に白ぶちの日の丸が描かれている、まるで戦争映画に出てきそうなやつだ。

それを見て叫んだのはハヤテだった。

「あれ疾風ですよ！！」

全員、この言葉の意味が全く分からなかつた。

「あのどういう意味？」

コナンが聞いてみた。

「いや、あの飛行機のことですよ。あれは旧日本陸軍の四式戦闘機疾風です。」

四式戦闘機疾風。現富 重工である中島飛行機が設計、開発した機体。世界一小さい2000馬力エンジンである誉を積んで、最高速度624kmを誇った。その高性能から大東亜決戦機と称され、終戦までの1年ほどの短期間に、日本と満洲で3000機近くが量産された傑作機。

「というのが疾風です。」

「君はすごいマニアックなことに詳しいね。」

快斗が誉めているのか呆れていのがよくわからなによつて言つた。

しかし、そんなことしている間に、その疾風は滑走路に向かって進んでいく。

その疾風に乗り込んでいるのはもちろんスネイクだ。

「あいつら追いついてきたな。」

彼の方もコナン、ハヤテたちを確認していた。早く飛び立ちたいところだ。しかし、自動車のエンジンと同じで、いきなり全開にすると壊れかねないので、ゆっくりと出力を上げていく。

「早く、早く。」

一分一秒がもどかしい。

一方、コナンや快斗もどう手を出したら良い物が迷っていた。相手が飛行機に乗っているのでは下手に近づくことは出来ない。一步間違えればプロペラに切り刻まれたり、機体に体を強打するかもしれない。

「どうする？」

「どうしろって言うんだ。」

一人とも困った。

と、そこでS.P.が銃を出した。

「これで撃つて・・・・・」

殺す気満々だ。それを慌てて一人が止める。相手を殺すことはコナンとしては探偵として許すわけに行かないし、快斗はやつに聞きたいことがたくさんあるので、やはり殺すことは許されない。

「ダメ！ それだけは絶対にダメ！！」

「しかしこのままでは逃げられてしまいます！！」

そうこうしているうちに、滑走路の端に疾風が着いてしまう。もう時間がない。

と、ここで。

「快斗君！ バイクを出して！ ！」

ハヤテが言った。

「え！？」

「早く！ ！」

快斗は言われるままにバイクを出した。

「そのままあいつ後ろについて。」

そして言われたとおりに運転する。距離が縮まる。と、そこで疾風が滑走に入ったのがわかつた。

「クソ！！」

快斗が舌打ちした。

一方ハヤテは機関銃の安全装置を外し、初弾を装填した。これでいつでも撃てる体勢である。

それを見て仰天する快斗。

「お、おい！！」

「大丈夫です。殺しませんよーー！」

そう言つた途端、ハヤテは引き金を引いた。

ダダダダダ・・・

7・8発発射した。ハヤテの発射した銃弾は狙いどおり一箇所に集中して命中した。命中したその場所は、脚だつた。それがポキリと折れて、スピードを上げていた疾風は右に傾き、翼が地面に接触した。そしてそのまま止まる。

「「「やつた！！」「「」」

全員が歓声を上げた。

だが、スネイクはまだ逃げる気だつた。素早く操縦席から這い出すと、走り出した。

「まだ逃げる気だーー！」

「僕に任せください！お嬢様に危険な目にあわせた人間を、僕は絶対に許さない！！」

そして、彼はバイクから飛び降り、スネイクに向かって走りはじめた。距離が詰まっていく、そして一定の距離まで近づいたところで、彼自身の必殺技を使つた。

「喰らえーー！疾風の如くーー！」

凄まじい風が巻き起こり、その技がスネイクに炸裂した。もちろん、大型ロボットさえ倒すこの技を喰らつて、さしものスネイクも耐えられる筈がなかつた。

「うわああーーー！」

吹き飛ばされた。そして地面に叩きつけられた。
もうとても逃げれる状況ではなかつた。

スネイクはそのまま氣絶してしまつ。

誰も気付かなかつたがその直前、こんな言葉を呟いていた。
「頼む・・・・・何でもいいから普通に捕まえて欲しかつた・・・

・・

三千院家の玄関に、コナン・蘭・小五郎・ハヤテ・ナギ・マリアらが集まっている。スネイクを捕まえた後は警察が来たり、事情聴取に付き合つたりと忙しかつたが、昼過ぎにようやく一段落した。そしてコナンたちは米花町に帰ることとなつた。

ちなみに、快斗がいなのは、いつのまにか消えてしまつていたからだ。カードをたつた一枚だけ残して。

そこにはこう書かれていた。

「またお会いしましょう。怪盗キッド」

カードを見て。

「つたく、キザな野郎だぜ。」

「コナンはそう言つたが、その顔には笑みがこぼれていたといつ。もつとゆつくりしていつたらどうだ? 家にはゲームとか漫画とか一杯あるから。」

ナギがそう勧めたが、コナンたちにはこれから帰つてやることが一杯あるのだ。

「コナン君。あんまり無理をしてはいけませんよ。」

「君のほうこそな。今度会うときは工藤新一として会つことになるのかな。」

コナンとハヤテはお互にそう言つて固く握手をする。

その隣ではマリアと蘭が挨拶を交わす。

「お世話になりました。色々あつたけど、楽しかつたです。」

「またいらしてください。」

そんな光景を少しこらだちながら、今回ほどさび田舎なじだつた

小五郎が見ていた。

「おい、車が来たから行くぞ！！」

小五郎にせかされ、二人ともしぶしぶ車に乗り込んだ。コナンたちは窓を開け、最後の会話をする。

「それじゃあ。」

「色々ありがとうございました。」

「また遊びに来てください。」

「いつでも歓迎して待っているぞ。」

「お気をつけて。」

そして、車はいざ米花町へ向け走り始めた。

ハヤテたちが手を振った。

「いつちゃいましたね。」

「また会えるよな。」

「ええ、きっと。」

「ああ！……！」

10分ほど走ったところで、突然小五郎が声をあげた。

「「？」」「？」

振り向く一人。

「綾崎ハヤテって名前。どこかで聞いたことあると思つたら…。」

「お父さんうるさいわよ。」

「ああ、すまん。サイン貰つておくんだつた。」

「「うん？？」

分け合つた秘密。共に過ごした時間。かけがえのない誰かを胸に抱き、人は生きる。世界を越え出会つた若者たちが再び自分たちの世界へと戻つていぐ。歩むべき道を辿つて。いつかまた、この広い世界で、きっと会えることを信じて。

イメージOP 「ハヤテの「」とくー!」 アニメ ハヤテの「」とくー!
OP
イメージED 「A 11 o f u s」 アニメ 銀河鉄
道物語 ED

完

「ひでよしと待てやーーひかりの出番つい結局なんやったんやー。
?」
「ふ、咲夜。」
「本当に最近影が薄い。」
「ボソッと囁くクラウス。

「私たちは所詮脇役・・・・・
最後に、冷静に伊澄が言い切つ
た。」

本当に完

ハルローゲ（後書き）

ここまで長々と付き合っていただきありがとうございました。自分で書いていても楽しかった作品でした。テストが一段落したら、こんどは失われし物を・・の方を書きたいと思っています。本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0004c/>

コナン v s キッド v s ハヤテ

2010年10月9日11時09分発行